

2018年

地域連携年報

第六号

滋賀短期大学
地域連携教育
研究センター

SHIGA JUNIOR COLLEGE
COLLABORATIVE
RESEARCH & COMMUNITY
COOPERATION CENTER



目次

1.	地域連携教育研究センターの体制	1
2.	調査研究プロジェクト	
(1)	「保育をデザインする力」を育成するための教育プログラムの開発 ～関連科目間の接続・連携という縦断的・横断的アプローチを通して～李 霞…3	
(2)	ベトナムにおける幼児教育の現状 ～「遊びを通した」活動を中心に～.....伊澤 亮介…4	
(3)	学生主体の地域連携活動による子育て支援の試み ～乳幼児のための音のできるおもちゃ（楽器）制作プロジェクトを通して～松井 典子…6	
(4)	地域とつながる子育て支援 ～人形劇・音あそびを通して～.....前川 賴子・浜崎 由紀・松井 典子…7	
(5)	「子育ての森」で育つ子どもたちの1年間 ～音・あそび・庭園思想の観点から～.....北後佐知子・浜崎 由紀・松井 典子…8	
(6)	地域で育む幼児のマナー教材の開発.....若生真理子…9	
(7)	幼児教育における数学的思考力を育てる教材開発プロジェクト.....久米 央也…10	
(8)	幼児期における金融リテラシー教育用プログラムの構築と評価.....小山内幸治…11	
(9)	滋賀県における「保育士の質」の実態と課題 ～滋賀県南部地域の調査を手掛かりに～.....李 霞…13	
(10)	古サルデニヤ語歴史文法の編纂.....金澤 雄介…16	
(11)	幼児教育における土粘土による造形遊びを展開するための指導教材・プログラム開発深尾 秀一…17	
3.	地域との連携による教育研究活動	
(1)	地域交流の場におけるサークル活動を通して学生の学び・成長について北後佐知子・浜崎 由紀・松井 典子…18	
(2)	まるごと竜王産スキヤキプロジェクト in グランマルシェ ～滋賀・竜王 健康＆長寿のヒミツ～発酵食品＆ヘルシー野菜～池之内愛子・岡田 香織・豊岡 真莉・中平真由…19	
(3)	近鉄リテーリング（大津サービスエリア下り）と生活学科食健康コース2回生の メニュー開発プロジェクト ～滋賀県の食材を使った丼ぶりとデザートのメニュー考案～山岡ひとみ・岡田 香織・池之内愛子…20	
(4)	ぜぜときめき坂ハロウィンに参加して服部 聖羅…21	
(5)	国際ふれあいフェスタに参加して服部 聖羅…22	

(6) ヘキセンハウスの制作	服部 聖羅	…23
(7) 滋賀短「ベーカリー塾」Cafe ～株式会社百町物語との連携活動～	岡田 香織	…24
(8) 滋賀短期大学と「道の駅竜王かがみの里」との連携企画型実習について ……………	小山内幸治	…25
(9) 「ゆうゆうかん P R E S S」商探訪の取材	江見 和明	…27
(10) 認知症サポートー養成講座とフォローアップ研修	江見 和明	…28
(11) 平成30年度生活衛生対策事業 シンポジウムー肉を知るー ¹ 肉のおいしさと栄養 立命館大学にて	原 知子	…29

4. 地域に向けた公開講座

(1) 淡海文化講座		
1) 健康長寿のための食生活 ～バランスの良い食事とは？～	原 知子	…30
2) 運動の基本 “歩行” ～ノルディック・ウォーキングのすすめ～	北尾 岳夫	…31
3) 滋賀県人の金融リテラシー	小山内幸治	…32
4) クラシック音楽の愉しみ ～木管五重奏の響～	日本センチュリー交響楽団ファゴット奏者 宮本 謙二	…33
(2) すみれキャリア講座		
1) 楽しく学ぶベトナム語	伊澤 亮介	…34
2) スウェーデンハンドセラピー ～背中に触れるヒーリング～	非常勤講師 朝野 典子	…35
3) 銅版画教室 ～おもしろくてたまらない銅版画の魅力を～	名誉教授 前川 秀治	…36
4) 楽しく作るパンの教室 ～基礎からヨーロッパ伝統パンまで その18・19・20・21～	金丸 政義	…37
(3) こども講座		
1) こどもフラワーアレンジ教室 ～サマーフラワーアレンジ～	グラティチュード flower designer 鷺嶋奈美代	…38
2) こども陶芸教室 ～やきもの再発見～	湖陶焼 長養窯 深田 猛	…39
3) こども書道教室（小学校1・2年生） ～硬筆の練習～	読売書法会理事 奥村 祥香	…40

- 4) こども書道教室（小学校3～6年生）
～夏休みの課題を書こう～……………読売書法会理事 奥村 祥香…41
- 5) こどもラボラトリー
～食べ物の不思議～……………清水まゆみ・池之内愛子・岡田 香織・豊岡 真莉…42
- (4) すみれジュニアキャンパス
1) 滋賀短Kids
……………灰藤友理子・岡田 香織・豊岡 真莉・池之内愛子・中平真由巳…43

5. 大学及び自治体との連携事業

- (1) 滋賀医科大学との共催公開講座
1) 認知症と栄養……………地域連携教育研究センター…44
2) 認知症予防を食事から考える
……………滋賀医科大学医学部附属病院 栄養治療部 高岡あづさ…45
3) 地中海+和で認知症予防に挑戦！
～魚を中心にバランスが基本～
……………原 知子・滋賀医科大学 仲川 満弓…46
- (2) 滋賀大学教員免許状更新講習
幼児教育の原点を学ぶ
1) 「根っこ」を育む保育・幼児教育の源流……………北後佐知子…48
2) 学びをつなぐ幼小連携について……………久米 央也…49
- (3) 滋賀県保育協議会との連携講座
1) 平成30年度滋賀県家庭的保育推進事業の基礎研修……………前川 賴子…50
- (4) 地域移動講座
1) 地域移動講座 in 守山……………柚木たまみ・松井 典子…51
2) 地域移動講座 in 長浜……………前川 賴子…52
3) 地域移動講座 in 高島……………浜崎 由紀…53
4) 地域移動講座 in 甲賀……………浜崎 由紀…54
5) 地域移動講座 in 近江八幡……………浜崎 由紀…55
6) 地域移動講座 in 東近江……………深尾 秀一…56
- (5) 図書館連携講座
1) 第3回滋賀短期大学図書館連携講座 in 浜大津……………浜崎 由紀…57
2) 第4回滋賀短期大学図書館連携講座 in 浜大津……………堀池喜八郎…58
3) 第8回滋賀短期大学図書館連携講座 in 和邇……………清水まゆみ…59
4) 第9回滋賀短期大学図書館連携講座 in 和邇……………伊澤 亮介…60
5) 第5回滋賀短期大学図書館連携講座 in 堅田……………金澤 雄介…61
6) 第6回滋賀短期大学図書館連携講座 in 堅田……………原 知子…62

(6) 学区連携講座
1) 第2回平野学区連携教育講座 中平真由巳 63

(7) 滋賀短期大学全学的プロジェクト
1) 第1回幼児教育アカデミーinSHIGATAN 久米 央也 64

6. 高大連携事業

(1) 滋賀県教育委員会の連続講座 65
(2) 滋賀県高等学校への出前授業 65

○資料

新聞などに掲載された記事（平成30年1月～12月まで） 67

1. 地域連携教育研究センターの体制

1. 目的

地域連携教育研究センターは、本学の研究活動の向上に関わる支援とともに、地域連携に関わる教育研究の推進等を目的とする。

2. 実施体制

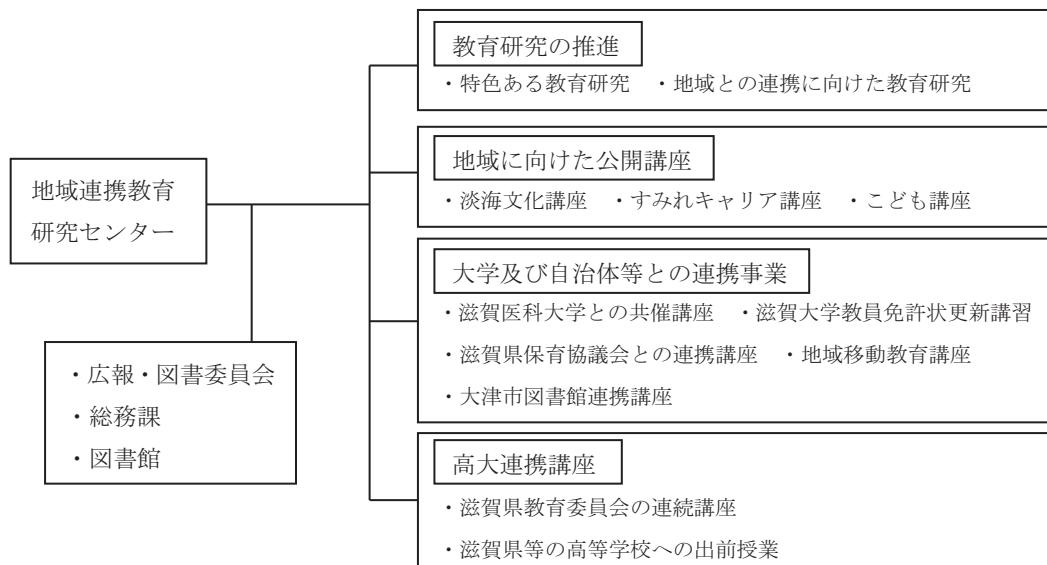
(1) 実施組織について

地域連携教育研究センターは、上記の目的を達成するため、センター長、副センター長、広報・図書委員会委員、総務課及び図書館職員によって組織される。

地域連携教育研究センターの構成（2018年度）

氏名	所属・職名	備考
深尾 秀一	幼児教育保育教授	センター長、図書館長
久米 央也	幼児教育保育学科准教授	副センター長
山岡ひとみ	生活学科講師	
池之内愛子	生活学科特任助手	
浜崎 由紀	幼児教育保育学科講師	
堀池喜八郎	ビジネスコミュニケーション学科特任教授	
吉田 英史	総務課長兼図書館室長	図書館職員
山本眞砂子	総務課係長兼地域連携教育研究センター係長	総務課職員

(2) 実施体制図



2. 調査研究プロジェクト

(1) 「保育をデザインする力」を育成するための教育プログラムの開発
～関連科目間の接続・連携という縦断的・横断的アプローチを通して～

幼児教育保育学科 李 霞

1. 取組の概要（目的と意義）

平成 29 年に改訂され、平成 30 年度から全面実施となった新保育所保育指針・幼稚園教育要領並びに認定子ども園保育教育要領において、卒園するまでに育成すべき子どもの資質・能力がかつてないほど強調されている。この改定に伴い、保育現場では、卒園するまでに育成すべき子どもの資質・能力を意識した保育活動の展開が一層求められ、そのために保育士の「保育をデザインする力」がより問われることとなった。一方で、これまで、保育士を目指す本学学生の課題の一つとして、とりわけ、保育記録や指導計画の作成能力の無さが指摘されている。保育士の養成機関として、こうした保育現場のニーズに応えるべく、本研究は、保育士を目指す学生の保育記録及び指導計画を作成する力、すなわち、「保育をデザインする力」を育成するための有効な教育プログラムの開発を目的とする。

2. 取組の方法等

本研究は短期大学の二年間という長いスパンを視野に、関連する科目間の接続・連携といった縦断的・横断的アプローチを通じて、学生たちにとって、積み重ねることのできる教育プログラムの開発を行う。具体的には、まず、幼児教育保育現場に対する訪問調査を踏まえて、卒業するまでに学生に身につけてほしい「保育をデザインする力」、すなわち全体的な教育目標を明確にする。全体的な教育目標を明確にしてからさらに、一年次前期・後期、二年次前期・後期のそれぞれの時期に開講する関連科目の役割を明確にする。次に、この全体的な教育目標や、それぞれの教科目の果たすべき役割に基づき、関連科目で取り扱う教育内容の統廃合や再編を行い、有効な教授方法を確立する。

3. 期待される成果

これまで、「保育をデザインする力」を育成するために、本学科では複数の科目が設けられてきた。しかし、これらの科目は担当教員の自主裁量のもとで分散的に展開されてきたため、教育目標や内容に重複や分断が見られ、教育効果を挙げてきたとは言い難い。「保育をデザインする力」の育成を担ってきた関連科目の連携や教育目標の共有のもと、それぞれの時期に開講する科目の役割・内容を明確にし、無駄のない教育活動の展開ができるることは、本研究における期待される成果であると考える。また、科目間の接続を図ることにより、積み重ねることのできる教授学習活動の展開を通じて、学習内容の定着が図られ、学生の「保育をデザインする力」の底上げも期待できる。

本研究は研究代表者である李霞及び同幼児教育保育学科前川頼子、浜崎由紀の三人による共同研究である。本研究の実施に当たって、平成 30 年度滋賀短期大学学長裁量経費を受給いただいたことを付記し、深く御礼申し上げる。

(2) ベトナムにおける幼児教育の現状 ～「遊びを通した」活動を中心に～

ビジネスコミュニケーション学科 伊澤 亮介

1. はじめに

本研究は平成 30 年度の学長裁量経費をいただき、資料の収集から現地調査までを行った。主に独立後から現代までのベトナムにおける幼児教育の変遷と現在の課題、そして「遊びを通した」教育についての概要を研究ノートとして紀要にまとめ、その上でハノイ市の幼稚園で現地調査を行った。

2. ベトナムにおける幼児教育の概要

1945 年の独立達成後も、対仏、対米戦争中は、情報と物質面で大きな制限があり、制度設計と教育理論の面では手探りの状態が続いていた。保育の役割も女性を戦争や労働に協力させるための子守りという意味が大きかった。戦後、国が世界に開かれてからは、世界の知見を取り入れて近代的な教育体制を整備していくが、近年詰込み型の教育への反省として、またグローバル時代に適した人材育成のため、「子どもを中心とした」教育が目指されてきた。そして、それを実現する手段として、幼児教育分野においては「遊びを通した」教育が大きな役割を果たすと考えられている。また、もう一つの大きな教育の目標として、愛国心、郷土愛の涵養と伝統文化の維持、発展というものがあり、そこでも「遊びを通した」教育が大きな役割を担うことが期待されている。このような現状は、日本の保育界においても共通点が多いと思われる。

3. 現地調査から

ハノイ市カウザイ、ギアタン、チャントゥービン通りにあるホアホン幼稚園を訪問し、グエン・タム教諭の協力を得て、当園における「遊び」を通した活動と伝統文化、民間の遊びの活用について紹介していただいた。5, 6 歳児のクラスでは「遊び」を通した活動として、「オ・アン・クアン」という盤上に並べた小石を使い二人で対戦するゲームや、かごの中に入れた人形を 4 人でとっていく遊びなど、数を意識した勝敗のある遊びが行われていた。また、1 位になった幼児には「金賞」、2 位、3 位にも「銀賞」「銅賞」という形で参加したそれぞれの児童が表彰されるように配慮されていた。



3, 4歳児クラスでは、童謡に合わせた踊りやリズム遊びを見る事ができた。その活動は、人形劇の人形やお面などベトナムの民間伝統文化を代表するようなものが多く飾られた部屋で行われた。一つの童謡に合わせてさまざまな振り付けで踊ったり、楽器を演奏したり活動で、子どもたちが使う楽器類の中には、ベトナムの伝統楽器もあり、伝統文化の雰囲気の中で、自然に子どもたちがベトナムの伝統的リズム、歌詞、楽器などに触れられるように工夫されていると感じた。



中庭では、再び5, 6歳児クラスが体を使った遊びを見せてくれた。まず、二人の子どもがネコとネズミになり、残りの子どもたちが手をつないで上に挙げた状態で二人を囲み、ネコ役の子どもが周りの子どもたちの間を縫って逃げるネズミ役を追いかける遊びがあり、その後に綱引きを見る事ができた。

このように、数字に親しむ、勝者を讃える、あるいは体を動かす、そして伝統文化に触れるといった様々な目的のもとで効果的に「遊びを通した」教育が活用されている姿を見る事が出来た。これらの活動は日常的に行われているものであるが、この他にも上で触れたような伝統的な人形劇(水上人形劇)の上演などが特別な日に教員の手で行われているようである。そういった活動や他園の活動も今後更に調査してみたいと考えている。

4. 最後に

詰込み式の教育に対する反省を踏まえ、現在ベトナム教育界が育成しようとしているのは、グローバル時代に適した自分で考え、問題解決ができる人材であり、同時に祖国とその文化を理解し愛することのできる人材である。訪問したホアホン幼稚園では、クラスの園児全員が「遊びを通した」活動に積極的に参加し、楽しんでいるように見えた。童謡を使ったものから民間の遊びを取り入れたものもあり、体をつかったり、数に親しんだりと教育的な狙いもはっきりしていた。更に、伝統文化の部屋が設けられ、童謡を使った遊びなど、自文化理解のための活動も早くから取り入れられている現状を見る事ができた。

最後にもう一度、学長裁量経費をいただいたこと、また、事前の交渉から現地における協力まで大変お世話になったグエン・タム教諭と調査を快く受け入れてくださったホアホン幼稚園に厚く感謝したい。

(3) 学生主体の地域連携活動による子育て支援の試み

～乳幼児のための音のできるおもちゃ（楽器）制作プロジェクトを通して～

幼児教育保育学科 松井 典子

1. はじめに

今年度の専門演習は、音を介した乳幼児のための「あそび」を創造し、外部に発信することをテーマとした。本研究では、専門演習Ⅰ・Ⅱ（松井クラス）を履修した学生 14 名と社会福祉法人湘南学園障害福祉サービス事業所れもん会社との連携のもと、乳幼児のための音のできるおもちゃの考案・制作の共同開発を行う。また、共同で開発した音のできるおもちゃを滋賀短期大学乳幼児総合研究所「すみれがーでん」の保育実践において乳幼児と保護者に紹介する。おもちゃを通した音との出会いやあそび、さらに音を介した乳幼児と保護者の関わり等を子育て支援の観点から考察する。

2. 活動内容

2018年5月22日(火)に本プロジェクトはスタートした。れもん会社と本学とを相互に訪問し、音のできるおもちゃの完成に向け進めていった。主な活動日程および内容は以下の表のとおりである。

	日程/場所	活動内容
第1回	5月22日(火) れもん会社	顔合わせ れもん会社の取り組みおよび施設見学について プロジェクトについて
第2回	6月26日(火) れもん会社	学生による3つのおもちゃのプレゼンテーション 質疑応答
第3回	7月24日(火) れもん会社	れもん会社による「木」の講習会 グループ討議(試作品に向けて)
第4回	9月25日(火) 滋賀短期大学 321教室	試作品完成 グループ討議(改良点など最終打ち合わせ)
第5回	11月27日(火) 滋賀短期大学 プレイルーム	音のできるおもちゃ完成 れもん会社による完成品の説明および質疑応答
第6回	12月6日(火) 滋賀短期大学 プレイルーム	「すみれがーでん」の保育実践において音のできるおもちゃを紹介

3. 総括

本研究は、研究趣旨に賛同いただいたれもん会社の多大なるご協力を頂き、支援を得て実施することができた。深く御礼申し上げる。今年度は、3種類の音のできるおもちゃを考案・制作することができた。学生が主体的に取り組んだ本研究の試みや詳細については、滋賀短期大学研究紀要第45号に記載することとする。

なお、本研究は平成30年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

(4) 地域とつながる子育て支援 ～人形劇・音あそびを通して～

幼児教育保育学科 前川 順子・浜崎 由紀・松井 典子

1. はじめに

子育て支援の取り組みとして、今年度は、子育て家庭の親子が安心して子育てができる、子育て支援プログラム（預かり保育あり）を開催した。ここでは学生も保育に参加することにより、子育てを考える機会となった。また、滋賀短期大学純美禮祭に於いて、音楽に親しむ企画として「民族楽器の演奏体験」また「人形劇鑑賞」を地域の方々に参加していただき実施した。

2. 活動内容

「子育て支援講座&保育体験」では、講座開始前に学生たちは講師から「子育て支援講座」の講義を受けた。なぜ、今子育て支援が必要なのか、親子の愛着関係について、子どもの行動やしぐさから子どもの欲求を読み解く方法等を学んだ。その後保護者が受講している間、未就園の子どもたちを預かり、学生は保育を体験した。

また、地域に根差した取り組みとして、純美禮祭では、音あそび・民族楽器による演奏と楽器体験を取り入れた内容と、人形劇団もぐらによる「三びきのこぶた」「しょうぼうじどうしや じふた」の人形劇鑑賞を楽しんだ。



♪ファンガ アラフィア♪
ファンガ アラフィア アシェアシェ
ファンガ アラフィア アシェアシェ
アシェ アシェ アシェ アシェ
アシェ アシェ アシェ アシェ
(西アフリカの歓迎のうた)



楽器体験終了後も子どもたちから「アシェ アシェ」の歌声が聞かれ、民族楽器を使った音あそびを楽しむ姿が見られた。今年度の乳総研の企画では、子どもから大人まで地域の方々に様々な文化に触れていただくことができた。

3. 総括

子育て家庭の親子が安心して子育てができる提案として、通常の乳総研活動（すみれがーでん）以外の活動として子育て支援プログラムを開催することで、子どもが育ち親も育ち、そこに集う全ての人が育ち合う場となった。また純美禮祭では、子どもの心の糧となるような、子どもも大人も楽しめる児童文化とふれあう機会となった。

(5) 「子育ての森」で育つ子どもたちの1年間 ～音・遊び・庭園思想の観点から～

幼児教育保育学科 北後佐知子・浜崎 由紀・松井 典子

1. はじめに

京都府宇治市炭山にあるNPO法人子育ての森プロジェクトの協力を得て、子どもたちがどのように自然や世界、人、そして自分自身と出会っているのかを明らかにするための調査を行う。今年度の研究目的は、ヒアリングやアンケート等を通して、子育ての森プロジェクトの活動を、遊び・音・庭園思想の観点から理論的に裏付けることである。また本研究の成果は本学の学生教育だけでなく滋賀県内の保育現場や子育て支援の場における地域連携へと還元することもできると考える。

2. 活動内容

NPO法人子育ての森プロジェクトを6・8・10・12・3月（予定）に訪問し、現地調査・ヒアリング・アンケート調査を行う。NPO法人子育ての森プロジェクトで実施されている親子参加型（幼児グループ）および小学生（土曜グループ）の「山うさぎ児童くらぶ」における子どもの体験を子どもの視点から捉え、考察する。本研究を通して、以下のような成果が見込まれる。

- ・「子育ての森」で育つ子どもの姿を音・遊び・庭園思想の観点から明らかにすることができます。
- ・乳幼児期に必要なおとなのかわりや自然・遊びの体験を明らかにすることができます。
- ・保育現場における実践の在り方への検討の手がかりにすることができます。
- ・子育て支援のあり方への検討の手がかりにすることができます。
- ・学生教育の具体的な事例として用いることができる。
- ・滋賀県内における地域連携の手がかりを得ることができます。

3. 総括

これまで現地調査およびNPO法人子育ての森プロジェクトの代表である村榮喜代子氏のインタビュー、小学生（土曜グループ）の「山うさぎ児童くらぶ」を利用する保護者、かつて利用していた子ども（現在中学生）と保護者へのインタビューを行った。村榮喜代子氏のインタビューについては、『研究「子どもと文化』』第23号（子どもと文化研究所 2018年9月）に『「子育ての森」で育つ子どもたち—NPO法人子育ての森プロジェクト代表村榮喜代子氏のインタビューを中心に—』として掲載している。今後、引き続き現地調査およびインタビューを行い、活動の理論的裏付けをすすめていく。

(6) 地域で育む幼児のマナー教材の開発

ビジネスコミュニケーション学科 若生真理子

1. はじめに

核家族化や少子化が進むにつれて、日常生活の場で人と関わる機会が減少したことによる子どものコミュニケーション能力の低下が問題となっている。文部科学省でも子どものコミュニケーション能力に資する取り組みが行われており、審議会で子どものコミュニケーションの現状と課題が報告されている。

他者との関係や相互作用のための技能として「社会的スキル」があげられる。本研究はマナーを相手を思いやる気持ちとその表現の仕方の一つと定義し、平成30年度から2年間の計画で、社会的スキルの観点から幼児のマナー向上を目的とした教材の開発を行い、その有効性を検討するものである。

2. 活動内容

幼児向けの教材開発を行うにあたり、幼稚園の役割や幼児期の特性を確認するとともに、平成29年に公示された幼稚園教育要領の改正ポイントを整理した。また幼稚園児の現状を把握するために附属幼稚園の先生方に「幼稚園児の言葉と態度について」のインタビューを行い、その結果を分析した。得られた知見や結果を踏まえたうえで、幼児にとって効果的な教材について検討を加えた。

3. 総括

附属幼稚園の先生方のインタビューからは園児が自分中心であることや対面コミュニケーションについて言葉と表情が一致しないこと、自分の気持ちをうまく表現できないことから円滑な人間関係を築けないという幼児の現状が明らかになった。

平成30年度の幼稚園教育要領の改正において、社会的スキルが扱うところの他者との関係づくりを円滑に運営する資質や能力に関連する記述が随所に見られることや、幼児教育と小学校教育の連携を重要とする観点からも就学前教育のひとつとして発達段階における社会的スキルのトレーニングの必要性が示唆された。

幼児が遊びを通して社会的スキルを身に付けるためのマナー教材を考えるにあたっては、幼稚園の役割や幼児の特性、利便性を踏まえ、ゲーム遊びを中心になっていく5,6歳児にとってカードゲーム教材が有効であると考えた。

今後はどのようなマナー教材が幼児の社会的スキルを向上させるのか、その有効性について調査研究を継続し明らかにするとともに、開発したカードゲームを通して、幼児と家庭、地域の高齢者施設での交流を深めることにも寄与していきたいと考える。

なお、本プロジェクトは平成30年度学長裁量による支援を受けたことを付記し、感謝の意を表す。

(7) 幼児教育における数学的思考力を育てる教材開発プロジェクト

幼児教育保育学科 久米 央也

1. はじめに

平成 30 年度よりスタートした幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携こども園教育・保育要領において、幼児期の終わりまでに育てたい 10 の姿が明記され、「数量・図形への関心や感覚」を育成することが明記された。

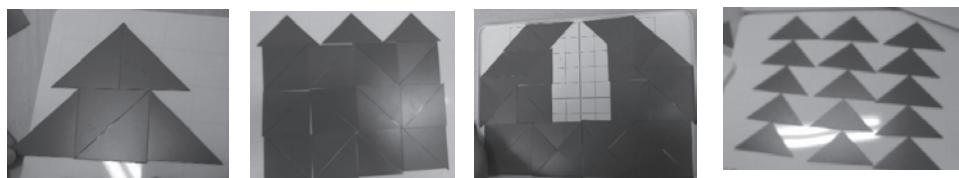
3 年計画の 2 年目にあたる本年度は、これまで研究してきた「手遊び歌」以外の幼児の日常的な活動や遊びの中にある数学の基礎を「算数的活動」を視点に分析し分類した。さらに、分類の結果を踏まえて、より一層数量・図形への関心・感覚が高まるような保育者の環境構成のあり方に焦点を当てて研究を深めていった。また、数量・図形への関心・感覚が高まる教材を開発し、公立幼稚園での検証を行っていく。

2. 活動内容

保育現場において、園児の行動を観察すると、知らず知らずに算数的活動を行っているのがわかる。園児の生活には算数的活動が多く隠されているのである。どのような算数的活動が、どのような生活場面で生まれているのかについて、公立幼稚園 5 歳児日常の姿を観察・分析し内在する「幼児期の算数的活動」を一覧表にまとめ分析考察した。

また、日常生活における算数的活動の分析と、手遊び歌に内在する算数的活動の分析をもとに、算数的活動の頻度を調査するとともに、園現場において取材を重ね、どの算数的活動が不足しているのか、または、必要としているのかについて聞き取りを行う中で、幼児教育における数学的思考力を育てる教材開発を試みた。

具体的には、磁石になっている直角に等辺三角形の色板を 1000 枚程度作成し、5 歳児のクラスの片隅に設置し、園児がどのような学びをするのかについて検証を行った。



5 歳児においても、図形を合成し新たな図形を生み出すことに関心がある子や、左右対称な図形にも関心がありシンメトリーの感覚が自然と身についている子が多いことがわかった。

3. 総括

今後は、さらに保育現場において、3 歳から 6 歳を対象に平面図形の教材に関する実践を重ね、図形の発達特性を明らかにし教材開発に生かしていく。また、他の幼児期の算数的活動が内在する教材開発を行い、園現場において実証検証、分析を行いたい。

なお、本研究は平成 30 年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し、謝意を表する。

(8) 幼児期における金融リテラシー教育用プログラムの構築と評価

ビジネスコミュニケーション学科 小山内幸治

1. はじめに

2012 年に、OECD/INFE による「金融教育のための国家戦略に関するハイレベル原則」が公表された。それに対応して日本においては、2013 年 4 月に金融経済教育研究会「最低限身につけるべき金融リテラシー」が、2014 年 6 月には金融経済教育推進会議による「金融リテラシー・マップ」が公表され、2015 年 6 月には、その改訂版が公表された。

このマップでは、幼児期における金融リテラシーには触れていない。本研究は日本における「金融リテラシー・マップ」の小学生に対する金融リテラシーを考慮に入れて、日本の幼稚園・保育所における金融リテラシー教育用の教材およびプログラムを作成しようとするものである。これらの内容と、文部科学省が教育要領で述べている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を考慮しながら紙芝居の作成を行った。

2. 活動内容

本年度はゼミの学生との共同研究として、幼稚園、保育所の園児・児童対象に金融リテラシーに親しむための金融紙芝居の作成を行った。今回作成したのはつぎの 4 種類の紙芝居である。

① 「もったいないねこ」

目的：資源の無駄遣いを意識させる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（以下育ってほしい姿）との関連：「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」

② 「うさちゃんとおともだち」

目的：ものを大切に取り扱う、友達を大切にする。

育ってほしい姿：「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「言葉による伝え合い」

③ 「ぼくたちのカレーライス」

目的：おかねの使い方になれる

育ってほしい姿：「健康な心と体」、「協同性」、「社会生活との関わり」、「数量・図形、文字等への関心」、「言葉による伝え合い」

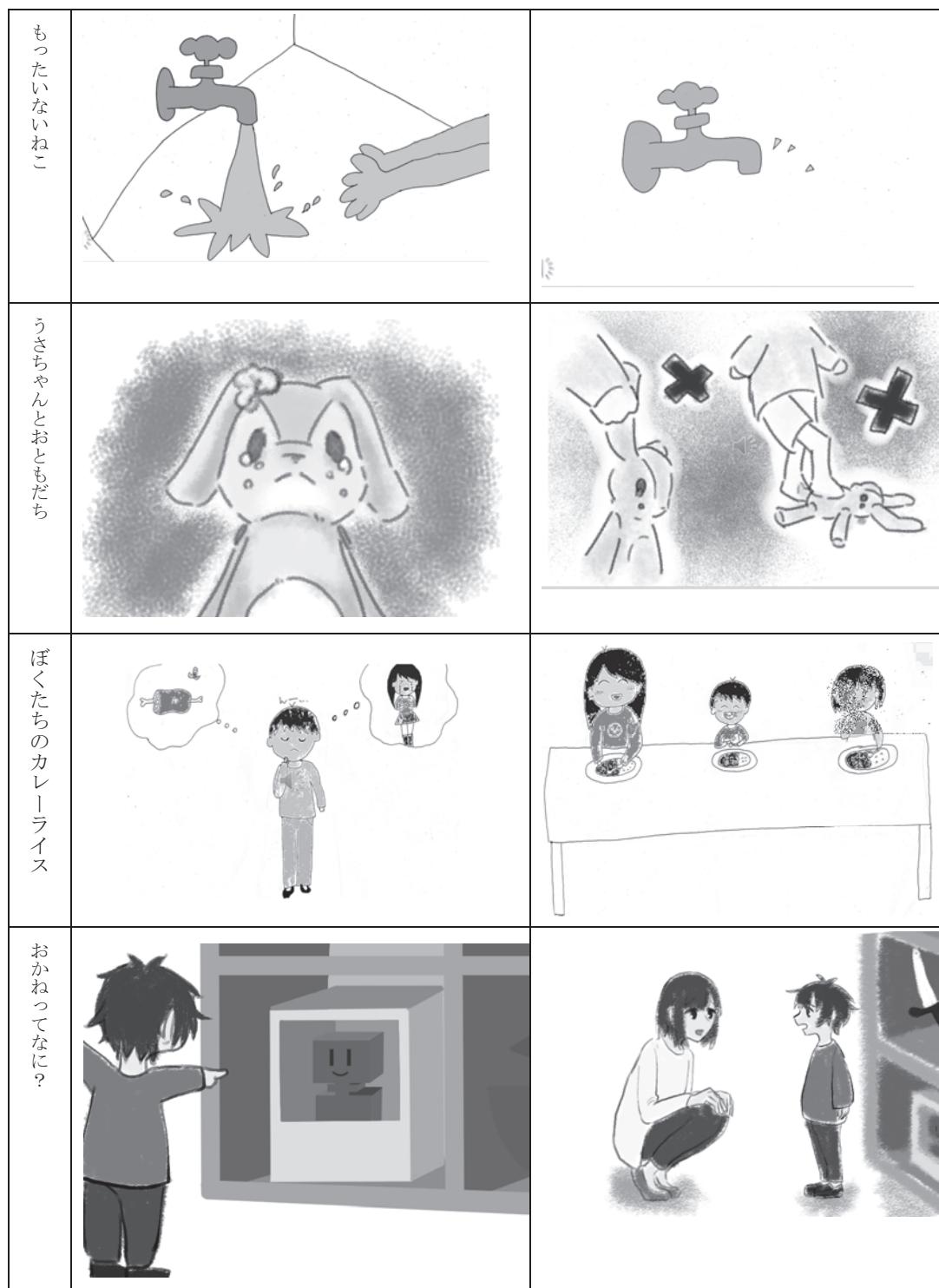
④ 「おかねってなーに？」

目的：おかねの役割や性質についてやさしい具体例にふれる。

育ってほしい姿：「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」、「思考力の芽生え」

3. 終わりに

今後、教材の評価および幼稚園・保育所での実践をもとに改良、制作を進める予定である。



(9) 滋賀県における「保育士の質」の実態と課題 ～滋賀県南部地域の調査を手掛かりに～

幼児教育保育学科 李 霞

1. 本研究の問題関心

保育の質に対する認識が高まりつつある現在、保育の質を確保するカギとなる「保育士の質」の低下が懸念されている。こうした中、保育士の養成という役割を担ってきた短期大学における教育活動の在り方が問われつつある。2年間という短い期間での教育活動により、学生たちを保育現場で求められている「即戦力」に育成する使命を全うするためには、短期大学における教育活動は保育現場で求められている「即戦力」の中身、すなわち、保育士の備えるべき力や資質に対応する形で展開しなければならない。しかし、これまで、保育現場で求められている「即戦力」の中身とは何かについて、解明されているとは言い難い。

そこで、保育の質を左右する「保育士の質」の確保の方策の策定に示唆を与えるべく、本研究は滋賀県南部地域における「保育士の質」の実態を究明し、「保育士の質」の確保を巡って、今後、行政側及び、保育士養成機関の取り組むべき課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の課題の解明を目指す。①「保育士の質」の実態においては、公立園と私立園に差があるか、また地域間における公立・私立の差が見られるか。②「保育士の質」の実態において、職歴・年齢・男女の差が見られるか、③保育現場で働く保育士の資質に見られる課題は何か、④保育現場で求められている保育士の資質とは何か、⑤「保育士の質」の向上を巡って、行政側及び保育士養成機関が今後取り組むべき課題は何か、である。

本研究は、平成27年度から平成29年度までの3年間にわたって行うものであり、初年度の平成27年度には、3年間計画のパイロット研究として、滋賀県大津市を対象とした調査研究を行った。2年目の平成28年度には、草津市・栗東市及び守山市における保育士の実態に対する調査に続き、3年目の平成29年度には、野洲市及び近江八幡市を調査対象地域として、現場で勤めている「保育士の質」の実態を究明する調査を続行した。

2. 研究方法

本研究は調査対象の保育園（公立・私立）に勤務する保育士（職歴3年未満、3年～5年未満、5年～10年未満、10年以上）、及びその所属園の園長先生を対象に実施するアンケート調査を踏まえて分析を行った。保育士の方には、自身の保育活動を振り返り、自己評価という形で回答をしてもらい、園長先生には、管理職という立場から、本アンケート調査で開発した、保育士の備えるべき資質に関する各項目についての重視度を5段階にわたって評価してもらった。また、「保育士の質」の向上を巡って、行政側及び保育士養成機関の今後の課題を明らかにするために、関係行政部門や保育所の責任者へのインタビュー調査も併せて実施した。なお、調査対象園の抽出は無作為に行うものである。そして、本研究で用いたアンケート調査項目は、研究代表者が保育現場や保育研究分野、並びに政策

分野における「保育士の質」に対する議論を踏まえて開発したものであり、「保育士の質」を、「職務内容の理解」、「人間性」、「知識・技術の習得」、「実践力」、保育士としての「意識・自覚・責任感」及び「豊かな教養」の6つの側面にわたって、計40項目で構成されるものである。

3. 研究成果

本研究で回収したアンケート調査のデータを分析した結果、以下のことが判明した。

- ① 「保育士の質」の実態における公立園・私立園の差について。本研究で開発した「保育士の質」に関するアンケート項目の「職務内容の理解」、「人間性」、「知識・技術の習得」、「実践力」、「意識・自覚・責任感」、「豊かな教養」の6つの面において、公立・私立保育園の平均得点に差が見られるものの、公立・私立のいずれの保育園に所属している保育士の自己評価においても、「人間性」、「職務内容の理解」及び「意識・自覚・責任感」といった、保育士の適性を問う項目において高い得点を取得していることが共通して確認された。その一方で、いずれの保育園に所属している保育士も、「知識・技術の習得」、「実践力」、「豊かな教養」という、業務を遂行するために必要なスキルの習得に関する課題を抱えていることが明らかとなった。
- ② 保育士の職歴、年齢、そして男女の差が、その資質に差をもたらしているのかについて。「男性・女性」といった保育士のジェンダーごとの平均得点を見てみると、男性保育士は職務を遂行する際に必要な知識やスキルの習得に課題を抱えているものの、保育士としての適性を問う項目に関しては、女性保育士よりも高い得点を取得していることが明らかとなった。他方、男性・女性の平均得点からは、どちらも「人間性」「職務内容の理解」「意識・自覚・責任感」といった、保育士という職業に対する適性を問う項目に関する課題は少ないと認識されている一方で、「知識・技術の習得」や「実践力」さらに「豊かな教養」といった、業務遂行に必要な技術面における課題を抱えていると認識されていることが示唆される。このような傾向は保育士の職歴、年齢ごとに対する調査結果からも確認された。
- ③ 保育士、特に職歴3年未満の新任保育士の実態及び抱えている課題は何かについて。どの職歴の保育士集団においても、「人間性」といった、職業の適性に関する資質が最も身についている資質として認識されていると同時に、「知識・技術の習得」や「豊かな教養」といった、業務遂行のために必要なスキルの習得に関する資質の向上に課題を抱えていると認識されていることが判明した。さらに、職歴3年未満の新任保育士の自己評価得点を「20代・30代・40代」ごとに比較してみると、ここでもどの年代の集団においても、自らの「人間性」に対する評価が高い一方、「知識・技術の習得」や「豊かな教養」といった面に対する評価が低い傾向にあることがわかった。
- ④ 保育現場で重視されている保育士の資質について。公立・私立保育園の園長先生に対するアンケート調査から、共通傾向として、「知識・技術の習得」や「豊かな教養」といった、保育の職務を遂行する際に問われるスキルに関する項目における重視度よりも、「人間性」や「職務内容の理解」といった、保育士の適性を問う項目がより重視されていることが明らかとなった。

-
-
- ⑤ 「保育士の質」の向上を巡って、行政側及び保育士養成機関側の課題も判明した。前者については、保育士にとって、働きやすい環境の整備や、キャリアアップのための支援体制づくりが求められている。後者については、保育士を目指す学生の人間性・学力・教養・責任感・専門的知識・技術の習得とともに、現場への理解を深め、現場の職員との交流の機会を作ること、人材を確保するための取り組みなどが求められていることが明らかとなった。

4. 今後の課題

アンケート調査で判明した上記の結果にはサンプルによる一定の限界が存在するものの、この結果から、今後のさらなる検討課題が浮かび上がった。

まず、公立・私立園における保育士の自己評価の得点に見られる差、そして、各地域での調査で判明した地域間の得点の差は、「保育士の質」の向上を巡って、それぞれの園や地域における取り組みと関連しているのではないかということである。こうした可能性は、「保育士の質」の向上を目指して、各園や各地域ではどのような取り組みが行われてきたかを、今後の調査で明らかにする必要性を示している。

次に、本調査で最も低い得点にとどまっている職歴3年未満の新任保育士や、20代の保育士の集団は、今後保育現場をリードする存在である。そのため、こうした集団の保育士の力量や資質の向上は優先的に考慮しなくてはならない課題といえよう。では、各園や各地域では職歴3年未満の新任保育士、20代の保育士の力量アップのために、どのような取り組みや工夫がなされているのか、今後の調査において明らかにしていきたい。

そして、「保育士の質」の向上を巡って、保育現場からの保育士養成機関への要望については、保育士養成機関の独自の取り組みによって改善できる課題もあれば、現場への理解を深め、現場の職員との交流の機会を作ること、人材を確保するための取り組みといった、保育士養成機関と行政や保育現場との連携が強く問われる内容もある。従って、今後、保育士養成機関の取り組むべき課題として、まず、「保育士の質」を確保するために、保育現場を含む地域資源の有効利用や、「保育士の質」の底上げを実現させるための教育プログラムの開発、カリキュラムの再編、有効な教材・教授方法の開発などが挙げられる。それとともに、行政及び保育現場との連携をいっそう密にしていくための方策も早急に模索する必要があろう。

本研究の実施に当たって、平成27年度から平成29年度滋賀短期大学学長裁量経費を受給いただいたこと及び、本研究の成果の刊行に当たっては、平成30年度滋賀短期大学学長裁量経費を受給いただいたことを付記し、深く御礼申し上げる。

(10) 古サルデーニャ語歴史文法の編纂

ビジネスコミュニケーション学科 金澤 雄介

1. はじめに

本研究では、古サルデーニャ語歴史文法の記述に向けて、Differential Object Marking（以下 DOM）について考察した。DOM とは、有生性、定性、トピック性などによって特徴づけられる直接目的語が前置詞 a(d) によってマークされるという現象を指し、スペイン語やルーマニア語などにも観察される。

2. 活動内容

本研究では、古サルデーニャ語文献 *Condaghe di San Pietro di Silki* (11 世紀) における、親族名詞における DOM の出現について記述した。そして DOM 付加に関わる有生性の階層は、名詞の数によって異なることを示した。古サルデーニャ語では、単数形の親族名詞（「息子」「母」など）では DOM をともない、定冠詞はつかない。単数形の有生の普通名詞（「奴隸」など）では、DOM はつかず、定冠詞をともなう。DOM 付加についての有生性の階層の観点からは、親族名詞は有生の普通名詞から区別され、より有生性の高い名詞として位置づけられる。

一方、複数形の親族名詞と有生の普通名詞における DOM の分布は、単数形の場合と異なる。親族名詞においては、DOM をともなう例に加えて、定冠詞のみがともなう例も見られる。そして有生の普通名詞では、定冠詞をともなう例に加えて、DOM がともなう例も観察される。複数形では、親族名詞と有生の普通名詞には DOM と定冠詞の両方がつきうる。これは、複数形における DOM 付加における有生性の階層では、親族名詞と有生の普通名詞の区別がないことを意味する。

3. 総括

本研究で得られた、古サルデーニャ語における有生性の階層と DOM および定冠詞付加の関係は以下のように図式化できる。

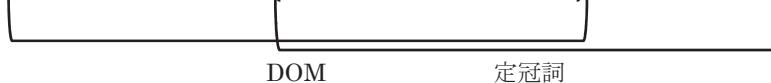
単数： 代名詞 > 人名 > 親族名詞 > 有生の普通名詞 > 無生物名詞



DOM

定冠詞

複数： 代名詞 > 人名 > {親族名詞 / 有生の普通名詞} > 無生物名詞



DOM

定冠詞

本研究成果は、学長裁量経費の支援を受けて 2018 年 11 月 9, 10 日にパリで開催された国際ワークショップ (Differential Object Marking in Romance – towards microvariation) で "Differential object marking in kinship terms and animacy hierarchies in Old Sardinian" というタイトルで発表をおこなった。ここに記して感謝の意を表する。

(11) 幼児教育における土粘土による造形遊びを展開するための指導教材・プログラム開発

幼児教育保育学科 深尾 秀一

1. はじめに

造形活動において、素材とのかかわりを通しての過程や体験など、プロセスや行為は子どもたちが生きる力を育むための重要な要素の一つと考えられている。しかし、「プロセスを楽しむ」という面で優れた教材・素材の一つである土の粘土は、取り扱いの難しさ、煩わしさ、作品制作の難しさなどの理由から、指導者に敬遠されがちな素材である。土粘土の指導教材・プログラム開発の目的は、指導者が土の粘土にかかわりやすくし、「豊かな感性と表現につながる土粘土の触覚的造形教育」における現場でのこどもの活動をより一層アクティブにする事を目的としている。

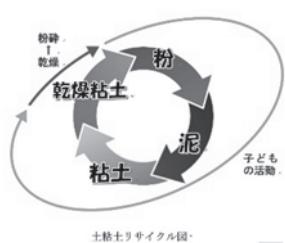
2. 活動研究内容

平成 29 年度は附属幼稚園において、土粘土を使った遊びの実践活動を行い、子どもたちの活動と教諭及び参加学生の土粘土の取り扱いを考察した。子どもたちの活動から見えてきたものは、土粘土という素材感や感触が子どもたちの感性に響き、ものづくりへと導かれる造形表現の根底ともいえる流れであった。そして、その結果をもとに、教諭・保育士にとって負担の少ない土粘土の扱いの方法や指導法を検討した。結果、指導者の負担となる部分の取り扱いは、陶芸の手法や取り扱い用具の工夫と環境設定でかなりの部分で軽減できることが分かった。

しかしこの時点では、素材（土）のリサイクルを人的負担と経済的負担においてどのように解決していくかが課題であった。そこで、平成 30 年度は、平成 29 年度に附属幼稚園において粘土遊びを実践した活動後の粘土を乾燥させ、簡易実験用粉碎機によって粉状にする実験を行った。結果、各園での粉碎ができることがわかり、素材（土）のリサイクルと粘土遊びに一つの方向性が見いだせた。

3. おわりに

今までの研究により、指導者にとっての素材ハンドリングと環境構成における一定の方向性が見いだせた。また粉碎機を利用した粘土のリサイクル手法についても検証ができた。土のリサイクルのための粘土粉碎機器は高額であるが、一定の地域で機械をシェアすることによりそのコストを下げることができる。近隣地域で粉碎機を共同導入し、翌年までに各園の乾燥した粘土を順次粉碎し管理していく事が最も簡単で将来的に経済的負担は少なくなるであろう。



なお、本研究は平成 29 年度の学長裁量経費により支援を受けたことを付記し謝意を表する。

3. 地域との連携による教育研究活動

(1) 地域交流の場におけるサークル活動を通した学生の学び・成長について

幼児教育保育学科 北後佐知子・浜崎 由紀・松井 典子

1. はじめに

2018年6月から12月までの全7回にわたり滋賀短期大学生活学科製菓マイスターコースの学生を中心としたベーカリー塾と大津市長等にある株式会社百町物語とのコラボイベント「ベーカリーカフェ」が菱屋町商店街で開催された。コラボイベントでは、ベーカリー塾によるパン・デザートの販売、生活学科食健康コースの Kitchen&Kitchen による特製ドリンク販売、幼児教育保育学科の学生によるサークル（あそびくらぶ nekko、子どもアートクラブ）によるふれあいあそび・紙芝居等、ビジネスコミュニケーション学科の学生によるコンピューター占いやジャグリング等、各学科の特徴を活かした取り組みを行った。有志で参加した幼児教育保育学科の学生は、本イベントが滋賀短期大学の3学科の協働した取り組みであったこと、乳幼児から大人まで、地域の幅広い年齢層の方に利用して頂いたことから貴重な学びを得た。

2. 活動内容

2018年 6月 10日 あそびくらぶ nekko による紙芝居

2018年 7月 11日 あそびくらぶ nekko によるふれあいリズムあそび

2018年 8月 11日 あそびくらぶ nekko による大型絵本の読み語りとタオルシアター

2018年 9月 12日 絵本コーナーの設置

2018年 10月 20日 あそびくらぶ nekko による絵本の読み語り
子どもアートクラブによる「3びきのこぶた」ペーパーサート

2018年 11月 24日 あそびくらぶ nekko によるふれあいあそびと紙芝居

2018年 12月 22日 あそびくらぶ nekko によるふれあいあそびとパネルシアター
子どもアートクラブによるクリスマスソングと一緒に歌おう
ミニプレイパークの設置

3. 総括

併設されたカフェの中にキッズスペースを毎回設置した。学生による紙芝居やふれあいあそび、楽器体験、ペーパーサート等は、予め時間や内容を告知しておくことで、乳幼児総合研究所「すみれがーでん」の会員や附属幼稚園の親子、店頭ポスターを目にした方が来店してくださった。絵本や木のおもちゃ、楽器をキッズスペースに整え、随時無料で利用して頂いた。幼児教育保育学科の学生がキッズスペースにいることで、子どもが学生と遊んでいる間、保護者にはカフェでくつろいで頂くことができた。一人ひとりの子どもや保護者と丁寧にかかる機会は、学生にとって充実感や達成感を味わうことができるものであった。あたたかな雰囲気のなか主体的な活動を通して経験は、保育者を目指す学生にとって確かな自信へつながった様子であった。

(2) まるごと竜王産スキヤキプロジェクト in グランマルシェ ～滋賀・竜王 健康＆長寿のヒミツ～発酵食品＆ヘルシー野菜～

生活学科 池之内愛子・岡田 香織・豊岡 真莉・中平真由巳

1. はじめに

竜王町観光協会主催のスキヤキプロジェクトのイベントは、毎回テーマごとに体験ができるステージイベントを交え、竜王町産の野菜・くだもの・近江米・黒豆・近江牛などの特産品を販売及びPRしている。2018年度は7回開催され、同年5月に生活学科の教員4名がステージイベントに参加した。

2. 活動内容

本イベントのテーマである「滋賀・竜王 健康＆長寿のヒミツ～発酵食品＆ヘルシー野菜～」をもとに、発酵食品である酢を使用したピクルスのPRを行った。ステージイベントにて「酢ばらしい！おいしく健康ピクルス作り体験」と題した酢に関するミニ講演をし、参加者を募りピクルス作り体験を行った。ピクルス作り体験では、予めカットしたパプリカやきゅうりなどの野菜をピクルス液につけて持ち帰ってもらった。このピクルス作り体験には前半・後半のステージイベント合わせて約30名が参加した。また、ピクルスのレシピ及びピクルスを使ったアレンジレシピを考案し、それらを掲載した冊子を作成し配布した。

3. 総括

ピクルスは、発酵食品である酢を使用した調味液に野菜を漬け込んだ保存食である。食卓にもう一品野菜が欲しい時、普段の料理にもう一味変化が欲しい時などに、保存食であるピクルスを活用することで野菜を効果的に摂取できる。今回実施した内容で、酢及びピクルスをより身近に感じ日々の生活の中に取り込んでもらえるきっかけになれば幸いである。

ミニ講演や冊子の作成などを通して、自分自身も酢をはじめ発酵食品に関する知識を深めることができ大変貴重な経験となった。今後もこのようなイベントには積極的に参加し、食を通して地域の人々との交流を深めていきたい。



(3) 近鉄リテーリング（大津サービスエリア下り）と生活学科食健康コース2回生の
メニュー開発プロジェクト
～滋賀県の食材を使った丼ぶりとデザートのメニュー考案～

生活学科 山岡ひとみ・岡田 香織・池之内愛子

1. はじめに

近鉄（近畿日本鉄道株式会社）が運営しているびわこ近鉄レストラン（名神高速道路大津サービスエリア内）は、地産食材を使用した料理や商品開発を推進している。これまでに、滋賀短期大学生活学科食健康コースの学生と産学連携しながら、滋賀の地産食材を使用した新メニューの開発及びその考案メニューのレストランラインアップなど、学生の視点を取り入れた地産商品のPR活動をレストラン運営に取り入れてきた。今回は6種類の丼ぶりとデザートを考案しコンテストを行ったことについて報告する。

2. 活動内容

滋賀県外から大津サービスエリアに立ち寄るお客様に、滋賀らしさを味わってもらうために、滋賀県の食材を利用して学生の斬新なアイデアを取り入れ、栄養価を管理したメニュー提案を行っている。メニュー提案は、フードコート内の人気メニューや利用するお客様、サービスエリア内の雰囲気などを知ることが必要であるため、大津サービスエリアの見学と概要の説明を受けてメニュー考案を始めている。コンテストまでに近鉄リテーリングの岩崎取締役、料理長、支配人の方々に来ていただき試食会を行っている。盛り付けの工夫、食材の組み合わせ、味付けなどのご指摘をいただき、再検討と再試食を行いコンテストに望んだ。メニューの選出方法は、近鉄リテーリング、西日本高速道路会社、滋賀短期大学の教員が審査員となり、実食審査、調理審査、プレゼンテーション審査を行い、グランプリ、準グランプリ、審査員特別賞が選ばれた。

3.まとめ

試行錯誤して取り組んだメニューはコンテストの形で評価され、今までの取り組みを振り返ることができ、今後の取り組みに対する意欲を高めることにつながった。学生からの達成感や喜びを感じ、貴重な経験を作っていた近鉄リテーリングのみなさまには感謝の意を表す。滋賀県の食材を使ってメニューを考案することは、地産地消と滋賀県の活性化につながり、栄養士として活躍する学生にとって地元の食材が扱えることは強みとなる。地域に貢献し、自信を持って活躍できる栄養士になれるように、今後もこのような取り組みを続けていきたい。



(4) ゼゼときめき坂ハロウィンに参加して

生活学科 服部 聖羅

1. はじめに

ゼゼときめき坂ハロウィンとは、膳所駅近辺の商店街が地域活性化を図ろう 9 年前から開催しているもので、近辺の料理屋や学校等の団体が出店を連ね、消防団の吹奏楽の演奏を先頭に、思い思いに仮装した人たちが街を練り歩き、パレードを楽しむイベントである。

2. 活動内容

本学からはベーカリー塾が出店し、ダンスサークルがステージ発表に参加した。ベーカリー塾では、秋の味覚「かぼちゃ」を練りこんだ揚げたてのかぼちゃドーナツを販売した。フレッシュのかぼちゃを使用することで、かぼちゃの優しい甘味が口の中で広がる。クッキーを刺してかぼちゃの形に成形し、見た目にもこだわった可愛いドーナツは、通りがかった人の目を惹きつけた。300 個ほど仕込んだ商品は、イベントが終了する 1 時間前に完売し、大盛況だった。

3.まとめ

大津の事業所や周辺地域の方と一緒にになってイベントを作り上げていくため、コミュニケーションをとる機会が多い。まだまだ製菓マイスターコースの知名度は低いと感じたが、このようなイベントに参加することで、本学を知っていただけるいい機会となった。我々ベーカリー塾のもつ人柄や雰囲気、味がイメージとなり、評判を生む。このようなイベントに参加する新しい目的を発見できたような気がする。また、たくさんの方に「ドーナツ美味しかった」と言ってもらえたが、隣で大津高校の家庭部が焼き菓子を販売しているのを見て、どの店よりも美味しいといけない、というプライドも生まれた。

このイベントに参加して、たくさんの方とふれあい、色々な物を見ることで、たくさんの刺激をもらい、今後の菓子作りやサークル活動の活力となった。来年度もぜひ参加したい。



(5) 国際ふれあいフェスタに参加して

生活学科 服部 聖羅

1. はじめに

国際ふれあいフェスタとは、国際交流や多文化共生を目的として大津市国際親善協会が主催しているイベントで、様々な国の方々が、母国の料理やダンスを通じて、交流を深めている。

2. 活動内容

平成 30 年 11 月 10 日（土）に、明日都浜大津ガス燈広場にて開催され、ベーカリー塾が参加した。ヨーロッパの伝統的なパンを中心に、フランス（ブリオッシュ）、アメリカ（シュガードーナツ）、ドイツ（バイツェン・ミッシュ・ブロート）、イタリア（グリッシーニ）、スイス（ツォプフ）の全 5 種類を販売。昔ながらの素朴でシンプルな味に仕上げた。シュガードーナツは、子連れや年齢層の高い客に人気で、グリッシーニは中年の男性方、ブリオッシュなどの料理に合うパンは、主婦の方に人気だった。味付けにこだわらず、素朴でシンプルな味は、好みを問わず買いやすかったのだろうと思う。また、おつまみやサンドイッチにするとより美味しいくなる、といった知識を伝えることで、たくさんの方に私たちのパンを手に取って頂けた。

3. まとめ

私たちベーカリー塾の活動は、パンや菓子を通してたくさんの地域の方とふれあい、人間関係を育むこと、そして自分自身の経験値を上げることだと思っている。自分たちのパンを食べて頂けることや、普段経験出来ない様々な国の方と触れ合えたことはとても貴重な経験だった。今後も、より多くの方と交流を深め、パンの面白さを知ってもらえるよう、積極的に参加したい。



(6) ヘキセンハウスの製作

生活学科 服部 聖羅

1. はじめに

平成 25 年よりびわ湖大津プリンスホテルより依頼されていたヘキセンハウスの製作も 6 年目を迎えた。今年度も金丸政義特任教授の指導の下、ベーカリー塾の 2 回生が中心となり、活動した。

2. 活動内容

今年度は、「サンタの幸せ宅急便」をテーマにして、北部を舞台に、世界中にプレゼントを配達するサンタの村を作品にした。

小麦粉約 40 kg、砂糖約 50 kg、卵約 120 個、蜂蜜約 12 kg、アーモンドプードル約 4 kg から作られるレープクーヘンという生地を用いてヘキセンハウスを組み立て、マジパンやシュガーペーストでサンタなどの登場人物やクリスマスツリーなどの装飾を作った。マジパンひとつひとつにストーリー性を追求し、見れば見るほど楽しめる作品になった。本年度も 12 月 26 日以降はお正月バージョンに装飾を変え、展示期間を延長した。

3. まとめ

毎年恒例となったヘキセンハウスの展示は、ホテルや地域、学内でも知名度が上がり、たくさんの方に見ていただけるようになった。今年度は、ベーカリー塾の学生が少数だったため、食健康の先生方や、ベーカリー塾の卒業生が代わり替わり手伝いに来てくれた。たくさんの人の手で作り上げられた今回の作品は、とても立派に仕上がった。

ストーリーを考え、イメージを膨らませながら作ることは、普段の菓子作りに非常に役立つ。そして、完成後の達成感を得られることや、それを仲間と共有できることはとても貴重な経験で、一人ひとりの成長に大きくつながっていると思う。

毎年このような機会を与えて下さるびわ湖大津プリンスホテルにはもちろん、忙しい中を仕事終わりに駆けつけて下さった先生方や、貴重な休みを丸 1 日製作に使ってくれた卒業生には、本当に感謝したい。



(7) 滋賀短「ベーカリー塾」Cafe ～株式会社百町物語との連携活動～

生活学科 岡田 香織

1. はじめに

この活動は、株式会社百町物語と連携し、大津市「なかまち商店街」にあるアンリ・シャルパンティエ浜大津店の跡地を利用した、滋賀短期大学のサークル「ベーカリー塾」を主体とする Café の開催である。生活学科からは、ベーカリー塾(製菓マイスターコース)と kitchen&kitchen(食健康コース)が参加した。また幼児教育保育学科、ビジネスコミュニケーション学科のサークルも参加する、3 学科合同のイベント活動である。

2. 活動内容

6月～12月にかけて月1回開催し、季節や行事に合ったテーマを設け、菓子やパン、ドリンクの販売を行った。ベーカリー塾は、季節の味覚を使用したパンや焼き菓子、クリスマスケーキの販売、また卒業生によるレストランでのランチ販売なども行った。食健康コースは、お酢や麹を使った健康ドリンクやスープを考案し販売した。

3. 総括

第一回のCafe オープン時より、非常に多くのお客様にお越しいただき、大盛況のイベントであった。回数を重ねるごとに、また反省会を重ねるごとに、より工夫を凝らし、お客様に喜んでいただくにはどうすれば良いのか、各々で考え改善していく力がつけることが出来たと思う。

製菓・製パンコースの学生にとっては、最も実践に近いかたちでの活動であり、第一に「お客様のニーズ」を考えた商品の考案・販売を経験する良い機会となった。食健康コースの学生にとっても、健康を謳い商品化したものを宣伝し購入していただくという経験は、食事提供に通ずるものがあると感じ、貴重な経験であったと思う。

ここでは、主に生活学科のベーカリー塾と kitchen&kitchen の活動について触れてきたが、幼児教育保育学科やビジネスコミュニケーション学科のサークルも多数参加し、滋賀短期大学3学科がそれぞれの特徴とスキルを活かしたイベントであったと言える。製菓衛生師や栄養士、保育士、医療事務など人と触れ合うことの多い職種の資格を目指す、滋賀短期大学の学生にとって、非常によい経験となる活動であったのではないかと思う。これらの経験が今後の活動あるいは仕事に活かされることを願っている。



(8) 滋賀短期大学と「道の駅竜王かがみの里」との連携企画型実習について

ビジネスコミュニケーション学科 小山内 幸治

1. はじめに

平成 27 年 5 月 17 日に滋賀短期大学は、株式会社みらいパーク竜王が運営する「道の駅竜王かがみの里」と、学生の連携企画型実習に関する協定書を締結した。これまで、学生ならではの視点を盛り込み、3 学科の専門分野を活かして、地元特産の高級な近江牛のスジを煮込んだ「竜王牛丼丸」などの新商品の共同開発やブランド化、キャラクターの制作、イベント開催などで成果をあげている。今年度は、平成 30 年 8 月 21 日に連携協定先として「道の駅アグリパーク竜王」を追加した新たな協定書が締結された。竜王町の 2 カ所の道の駅で、学生が実践的に実習・活躍できる場が提供されたことにより、道の駅の活性化にさらに寄与できるようにさまざまな取り組みを行っていく予定である。平成 30 年は下記のような連携企画型実習が行われた。

2. 活動内容（12 月現在までの状況）

①3 月 3 日（土）、本学と「竜王かがみの里」との共同でひな祭りフェアを開催した。

かがみの里の情報館において、生活学科の学生を中心に、おひな様デザートを自作していただくデザート教室、幼児教育保育学科の学生によるミニコンサート、ビジネスコミュニケーション学科の学生による運勢占いを開催し、小さいお子様からご年配の方まで多くの方に楽しんでいただくことができた。

②10 月 14 日（日）、ビジネスコミュニケーション学科の学生が、アグリパーク竜王で行われた「竜王町まるごとすきやきプロジェクト」のイベントに参加し、生活学科ベーカリー塾の学生が作ったパンプキン・カップケーキとパンプキン・クッキーを販売した。優しい味が好評で、完売した。また、ビジネスコミュニケーション学科の学生で、数々の大会で入賞歴のある木下洸希君によるジャグリングショーも開かれ、会場から大きな喝さいを浴びていた。

③平成 30 年 11 月 3 日（土）・4 日（日）に行われた学園祭「純美禮祭」では、ビジネスコミュニケーション学科の学生が「竜王野菜直売所」を開設し、当日仕入れた竜王産の新鮮な野菜の販売を行った。近隣住民でこの野菜直売を楽しみにしているという方もおり、毎年購入に来ているとおっしゃる方もいた。今年も野菜は二日目早々に完売した。

3. 総括

毎年さまざまな取り組みを行う中で、学生は、将来につながる非常に貴重な経験をしたと考えているようである。「道の駅」からの学生の評価も高い。今後、学生がさらに成長できるように、プログラムを充実させていきたい。



協定書締結式 西田竜王町長 秋山学長



ひな祭りフェアでのおひな様デザート



ひな祭りフェアでの学生の演奏



「すきやきプロジェクト」での販売準備の様子



「すきやきプロジェクト」での木下君のジャグリングの演技



(9) 「ゆうゆうかん PRESS」商探訪の取材

ビジネスコミュニケーション学科 江見 和明

1. はじめに

ビジネスコミュニケーション学科は、まちなか交流館ゆうゆうかんが発行している「ゆうゆうかん PRESS」という機関誌の中の商探訪というコーナーを担当している。このコーナーでは、地域の様々な会社や機関を学生が取材し、記事を書いている。

2. 活動内容

今年度は、「琵琶湖の魅力前面に」(Vol.9) と「まちのパン屋さん」(Vol.10) という 2 つのテーマで取材を行った。前者は、2 回生の上藤茜さん、池上ゆりえさん、石本桃子さん、川村明日香さん、中西優衣奈さんが担当し、びわ湖大津プリンスホテルの事業戦略リーダーである竹内あづさ様と琵琶湖ホテルの広報担当、大林令湖様にお話を伺った。両ホテルとも滋賀・琵琶湖の魅力をアピールする様々な企画をされており、学生も、改めて地域と連携することの大切さを感じていたようである。

後者は、1 回生の久保陽菜乃さん、佐野希理香さん、寺本芽以さん、2 回生の深尾友貴さんが担当し、月輪にある「サースフェー」の住田義男様と大津赤十字病院近くの「ドライリバー」の干川弦（ほしかわゆずる）様にお話を伺った。お二人との大変個性的な方々で、それがお店の独自性にも通じているようだった。学生は、お二人の経歴や考え方を伺い、自分たちも様々な経験をして個性を發揮できる仕事に就きたいと感じているようだった。

3. 総括

学生にとって、短大で講義を受けることはもちろん重要だが、自ら行動して情報を得ることがより生きた勉強になるとを考えている。このゆうゆうかんプレスの取材の様に、地域に出ていきさまざまな人にお話を伺い、その人の生き方や仕事ぶり、考え方を聞くことは学生にとってとても貴重な体験になっていると思う。今回の取材にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。有難うございました。



(10) 認知症サポーター養成講座とフォローアップ研修

ビジネスコミュニケーション学科 江見 和明

1. はじめに

平成 30 年 7 月 26 日（木）にビジネスコミュニケーション学科の 1 回生を対象に認知症サポーター養成講座を実施した。認知症サポーターとは、NPO 法人地域ケア政策ネットワーク「全国キャラバン・メイト連絡協議会」が実施する認知症サポーター養成講座を受講・修了した者をいう。ビジネスコミュニケーション学科では、平成 28 年からこの取り組みをはじめた。

2. 活動内容

平成 29 年度からは、養成講座で学んだことを、普段の生活で実践できるようになることを目的に、フォローアップ研修を開催するようになった。今年度は、9 月 26 日（水）に行った。フォローアップ研修をより充実したものにするために、夏休みに認知症に関する情報を集めるという宿題を出し、その成果についてグループで話し合ってもらった。実際に認知症の方と接した経験について話すもの、関連する DVD を見てその内容について話すもの、またシンポジウムに参加して学んだ知識を紹介するものなど、熱心に取り組んだ者が多く見られた。こうした情報交換をしたうえで、認知症サポーターとしてこれからどんなことをやってみたいかという意見を出し合い、最後には各グループで発表してもらった。事後のアンケートには、「認知症について詳しく知らなかつたので良い学習になりました。認知症のことについて知って興味を持ったし、困っておられたら自分にできることをしたいと思いました。」「グループワークでいろんな意見があり、面白かった。認知症とかわる体験をした人もいて、話を聞いてたくさんのことを探りました。」などの感想があった。フォローアップ研修についての満足度は、非常に満足 13.5%、満足 50.0%、普通 35.4%、やや不満 0%、不満 1.0%、研修内容に関する満足度は、非常に満足 13.5%、満足 47.9%、普通 37.5%、やや不満 0%、不満 1.0% という結果であった。

3. 総括

超高齢社会が到来している日本では、これからますます認知症高齢者の数が増えることが予想されている。認知症の方と接するには、認知症の知識を持ち、適切な方法でコミュニケーションをとることが重要である。アンケート結果では、満足度について「普通」という回答が多かった。身近に認知症の方がいないと、学ぶことの問題意識をもちにくいくことから、そのような結果になったと考えられる。しかし社会に出て多くの人と接する中で、ここでの学びの意味を後から知ってもらえるのではないかと考えている。ご指導いただいた社会福祉法人湖青福祉会の大江芳征先生、大津市健康保険部、長寿政策課の平野法恵様、中村悟志様に心からお礼申し上げます。

(11) 平成 30 年度生活衛生対策事業 シンポジウムー肉を知るー 肉のおいしさと栄養 立命館大学にて

生活学科 原 知子

1. はじめに

平成 30 年度滋賀県生活衛生対策事業として、消費者に対して食肉の安全性、栄養価値に対する正しい情報を提供し意見交換を行うことにより、食肉に対する正しい理解を促す、という目的で、11月 30 日立命館大学において、食肉シンポジウム - 肉を知る - が実施された。

立命館大学 小沢道紀氏の司会進行にて、

I 立命館大学 新山陽子氏「牛肉の流通とトレーサビリティの確保」、

II 滋賀短期大学 原知子「食肉のおいしさと健康」、

III 立命館大学 柿谷康仁氏「食肉と衛生について」

3題の話題提供、食肉協会のコメント、さらに会場からの質疑応答があった。

食肉のトレーサビリティをはじめとする生産と流通に関する知見、食肉成分についての基本的な知識、安全に食肉を食べるための基礎知識の確認等について、本学食健康コース 2 回生の学生を含めて熱心に聴講していただいた。

2. 講座概要 「食肉のおいしさと健康」

1) 食肉の成分・栄養性

食肉の種類、組成、基本的な栄養成分について解説した。特にアミノ酸組成のそろったタンパク質源として重要な食材であること、さらに、食肉の場合は、熟成という過程を経ることで、ペプチドやアミノ酸が増加し、タンパク質自体の機能のみならず、疲労回復機能やおいしさが加わり満足感も得やすい。

2) 食肉のおいしさ

うま味成分以外にも触感がおいしさに影響する。舌触りは含有している脂肪酸の種類によることが多いが、昨今はオレイン酸含量の高い牛の改良も進んでいる。また、食肉は、種類や部位により同じ牛肉でも、全く特徴が異なり、調理方法も異なる。それらを使い分けて経済的においしく、ヘルシーに利用することが望まれる。

3. まとめ

食肉=食べすぎてはいけない、というイメージが強くなっているが、ロコモーティブシンドロームや高齢者のフレイル予防など、タンパク質摂取の必要性が再認識されている。飽和脂肪酸の摂取過多や、生肉摂取および交差汚染による食中毒に注意を払って、適切なタンパク質摂取が望まれる。

近江牛はその名の通り滋賀県の名産品である。食材としての食肉のメリットを生かして、おいしく安全に利用していただけると幸いである。

最後になりましたが、この機会をいただきました立命館大学柿谷康仁先生、滋賀県食肉衛生組合の方々に感謝いたします。

4. 地域に向けた公開講座

(1) 淡海文化講座

1) 健康長寿のための食生活

～バランスの良い食事とは？～

生活学科 原 知子

1. はじめに

生活の質（QOL）を保つて健康に過ごすにはバランスの良い食事を、と言われる。では、そのバランスの良い食事とはどんな食事なのか、どういう生活が望ましいのか、改めて考える機会としていただく目的で、「バランス」「実践」をキーワードに食生活の基本についてお話しした。

（2018年10月13日土曜日 本学すみれホールにて）

2. 講座概要

滋賀県は、男性の平均寿命が日本一と、長寿県である。平均寿命と健康寿命が接近しているのが望ましいが、全国的に平均寿命と健康寿命の差が、男性で約9年、女性で約12年という状況で、高齢になってしまってもADL（日常生活動作）ができる状態で寝たきりにならず人生を終えたいものである。

食べ物は、「これを食べていれば良い」という絶対的なものではなく、健康長寿のための食生活はつまるところ「バランスの良い食事」ということになる。しかし、この「バランス」が難しい。食事は1日3食、1年365日としても1095回、20～80歳までの60年として65700回、約80年として87600回の食事となる。毎日何気なく過ごしていると忙しくて欠食したり、簡単に済ませてしまったり、ついつい我慢してしまうが、少しの差が7～8万倍の違いとなってくる。講座では、食事バランスガイド、弁当箱法、食品群のチェック、ダイエットデザインハウス、皿数摂取法、ベジフルセブン、など毎日継続的に簡単にご自分の食生活をチェックする方法を紹介した。また、ライフサイクルにおいて、若年層では低体重、中高年層では過体重、高齢層ではまた低体重が要注意ということで、ご自分のBMIを計算して身近な体重管理の目安を確認した。

高齢者におけるロコモーティブシンドロームやフレイルと食事内容の関連を検討した報告には、摂取食品が多様なほど、握力や歩行速度などの身体機能も良好というデータもあり、健康長寿のためには、毎日の食事で多種類の食品を摂取して、規則正しい生活を送る、運動をする、などの食習慣を確立して、自分自身の身体のメンテナンスをする必要がある。

3. 終わりに

健康長寿への関心は大変高く、多くの方々が参加してくださった。講座でご紹介した食事内容のチェック方法のうち、毎日継続的にご自分が利用しやすいと思える方法を用いて、健康管理の一つとしていただければ幸いである。

最後に、紙面をお借りして、ご参加いただいた方々、講座を運営していただいた方々に謝意を表す。

(1) 淡海文化講座

2) 運動の基本 “歩行”

～ノルディック・ウォーキングのすすめ～

幼児教育保育学科 北尾 岳夫

1. はじめに

便利さや省力化を求める現代社会において、“歩行”という運動がどれだけ残されているだろうか。子どもたちの運動発達を概観すると、人間が最初に獲得する運動は“歩行”へとつながる“移動運動”であることが分かる。そして“移動運動”的獲得をベースにして、走・跳・投に代表される“基本運動”が積み上げられていくのである。人間の最もベースとなる歩行運動の機会が奪われている現代社会において、意識的に“歩行”という運動を考える必要があるのではないだろうか。

このような現代社会に潜む問題から、今回は“歩行”を現代人に必要なエクササイズとして捉えるとともに、特に1980年代に日本に上陸したとされる、スキーで使用するストックを活用したウォーキングであるノルディック・ウォーキングに触れることで、より積極的なウォーキングエクササイズを理解してもらうことが本講座の趣旨である。

2. 活動内容

平成30年10月13日、本学体育館において本講座を実施した。前半は歩行運動、及びノルディック・ウォーキングに関する理論的側面を確認する座学を行い、後半は実際にノルディック・ウォーキング専用のストックを装着し、ストックの使い方などの説明、そして短時間ではあるが実際にストックを使った歩き方の体験をした。



3. 総括

想定していた以上に受講者が多く、交代でストックを使う状況となつたため、実際に体験をする時間が短くなつたことが残念であった。また、自分のストックを持参している受講生も数名見受けられた。



ストックを使う目的としては、転倒予防という側面と上肢の運動も取り入れたより積極的なエクササイズにするという側面がある。「ストックの使い方がよく分からず置きっ放しになっていたが、使い方を聞けて良かった。」という受講者もあり、全く初めての方、少し経験のある方ともに意義のある時間であったと考える。運動する時間がより確保できれば、なお良い機会であった。

(1) 淡海文化講座

3) 滋賀県人の金融リテラシー

ビジネスコミュニケーション学科 小山内幸治

1. はじめに

金融リテラシーは、「金融に関する健全な意思決定を行い、究極的には金融面での個人の良い暮らし(well-being)を達成するために必要な、金融に関する意識、知識、技術、態度及び行動の総体」と定義づけられている。また、近年の経済のグローバル化、少子化や先進国の財政悪化、終身雇用制の崩壊、非正規雇用の増加、社会保障予算の削減など多くの要因から、各個人がライフデザインとマネープランの設計に早くから取り組む必要性が生じてきたため、各国の政府や中央銀行により金融リテラシーが重要視されている。我が国でも、金融広報中央委員会が、わが国における18歳以上の個人の金融リテラシーの現状を把握するために、わが国の人口構成とほぼ同一の割合で収集した18~79歳の25,000人を対象に、インターネットによる大規模なアンケート調査を行った。この調査結果をもとに、滋賀県人の金融リテラシーを考察した。

2. 内容

調査からみた滋賀県人の金融リテラシーの特徴は以下のとおりである。

- ① 滋賀県人の金融リテラシーは、高いといえる。特に60歳以上の金融リテラシーが高い。
- ② 滋賀県人は、家計管理の知識はあるが、緊急時に備えた資金を確保している人の割合は平均的である。
- ③ 滋賀県人は自分の金融知識に自信がない。
- ④ 滋賀県人は金融トラブルに巻き込まれる割合は低い。
- ⑤ 滋賀県人は借り入れの時他の商品と比較して借入している。
- ⑥ 滋賀県人の投資状況は平均的であるが、外貨預金に関しては、意味をよく理解せず投資している割合が高い。
- ⑦ 滋賀県人は現在の資産・負債の状況におおむね満足している。
- ⑧ 滋賀県人は、他人の選択から影響をうけない。

滋賀県人は、金融リテラシーは高く、経済的には満足している人が多く、人の影響をうけず、自分の判断で金融行動を決定する人が多いということがわかる。

3. 総括

これから社会で暮らしていくためには、金融に関する健全な意思決定を行い、金融面での個人の良い暮らし(well-being)を達成するために必要な、金融に関する意識、知識、技術、態度及び行動を身につける必要がある。現時点では、滋賀県人の平均的な金融リテラシーは高いが、低い項目もあり、十分とは言えない。さらに、金融リテラシーの向上を目指していくべきである。

(1) 淡海文化講座

4) クラシック音楽の愉しみ ～木管五重奏の響～

日本センチュリー交響楽団ファゴット奏者 宮本 謙二

1. はじめに

室内楽とは様々な楽器で様々な組み合わせによって音楽を楽しむジャンルである。最も有名な組み合わせは弦楽四重奏、ピアノ三重奏でこの他には木管八重奏、金管五重奏さらに弦楽器と管楽器を組み合わせたものがある。今回はその中から木管五重奏を取り上げ、その魅力を楽しむとともに、またなぜ木管楽器の中に金管楽器のホルンという楽器が加わっているかを考えてもらった。

2. 活動内容

木管五重奏の編成はフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルンである。木管楽器は形も大きさも発音体もそれぞれ違う。ちなみに弦楽器は形状も発音の仕方は同じであるが、楽器の大きさだけが違う。まずフルートは今や金属でできているのが主流だが、かつては木でできていた歌口に横笛で直接に息を吹き込んで音を出す。その他の木管楽器はリード（植物の葦を加工したもの）を使用するが、クラリネットは1枚のリードを楽器のマウスピースにつけて、またオーボエやファゴットは2枚のリードを重ねて振動させて音を出す。そしてフルートとクラリネットは円筒管、オーボエとファゴットは円錐管、さらにフルートの全長は65cm、ファゴットの全長2m60cmと楽器の大きさもそれぞれ違う。楽器は大きくなればなるほど低い音が出る。木管楽器の魅力は何といってもそれぞれの楽器の音色に特色があり発音体の違う楽器で、その楽器同士が交わって醸し出す響きが色彩感を豊かにすることである。

3. 総括

本講座では個々の楽器の音色を紹介しながら、時代の違う楽曲の一部を紹介した。さらに金管楽器のホルンがなぜ木管楽器に加わっているかについては、ホルンは木管楽器と同じように柔らかく旋律を奏でることが出来る上、パワーもありホルンが加わることによってさらに重厚なサウンドになることを実感してもらった。



(2) すみれキャリア講座

1) 楽しく学ぶベトナム語

ビジネスコミュニケーション学科 伊澤 亮介

1. はじめに

近年、日越関係の深化とともに、観光やビジネスで日本を訪れるベトナム人が増えており、またベトナムを訪れる日本人も多くなっている。その傾向は、今後も更に強まっていくことが予想される。そこで、本講座では、ベトナム語の基礎を身につけることを目的として、まずはベトナムという国とベトナム語の基礎知識について、日本と日本語（特に漢字）との関係から解説した後に簡単な単語とフレーズを練習しながら発音の基礎について実践的に学んだ。

2. 講座内容

まず、ベトナムの歴史について、親しみ易いように日越関係を軸にして概観した。次に現代ベトナム語の基礎知識を簡単に紹介した。更に、漢字を使用していたベトナム人が民族文字であるチュノムを考案し、さらに独立後はアルファベット表記であるクオック・グーを採用するに至る経緯を説明した。その中で、現在でもベトナム語には漢語由来の語が多く使われていること、それらは日本語の漢字の読みみと似ており、意味も同じものがあることを、具体例を挙げて紹介し（例えば、「大学」という意味をもつ語はクオック・グー標記では *Dai hoc*、発音はダイ・ホッとなる）、発音練習の導入とした。

ベトナム語は、日本人にとって特に発音が難しく、一つ一つの母音と子音の発音の仕方、そして六つの声調をマスターするだけで相当な時間を要する。そのため本講座では、日本でもお馴染みの料理の名前や数詞といった基本単語から始めて、簡単な挨拶と自己紹介、物の値段を尋ねるといったフレーズを挙げ、そこから出てくる語の発音だけを集中的に練習した。その中で特に、挨拶の練習について、ベトナム語でコミュニケーションをとる際に最も重要となる呼称の問題を少し詳しく解説した。相手によって適切な呼称を使い分けることが敬意や親しみを表すことの基礎になるのがベトナム語であるからである。例えば、簡単な旅行案内などでは、「こんにちは」を *Xin chào.* シンチャオと書いていることが多いが、*xin* をつけるよりも、むしろ相手を呼ぶことで敬意や親しみを表すことができる。たとえば、*Chào, anh.*（同年代の男性に対して使う呼称）などと言った方がよりベトナム語らしい表現であろう。

3. まとめ

受講者が少なかったこと、基礎知識を紹介し、発音を練習するにはあまりに時間が短かったことは残念だったが、今回の受講生の方がベトナム旅行の折はもちろん、日本で観光客や実習生、あるいは長く日本で働くベトナムの方と接する際に、日本語や英語だけでなく、ベトナム語を使ってみようと思えるきっかけになれば幸いである。

(2) すみれキャリア講座

2) スウェーデンハンドセラピー ～背中に触れるヒーリング～

滋賀短期大学 非常勤講師 朝野 典子

1. はじめに

スウェーデンハンドセラピーは、背中や手足にやさしく触れることにより、さまざまな心身の症状を緩和する手技である。1960年代にスウェーデンで生まれたこのセラピーは、日本においても医療や福祉の場を中心として普及しつつある。このセラピーによって分泌されるホルモン「オキシトシン」は別名「愛情ホルモン」とも呼ばれ、信頼関係を築き良好な人間関係を深める働きが近年注目を集めている。心身の不調に悩み、リラックスを望む現代人に役立つことを願い、着衣のままでおこなう背中の施術体験を実施した。

2. 活動内容

セラピーの背景理解のため、スウェーデンの概要と特色を簡単に紹介した。受講者は、日本よりも充実した社会保障、移民難民の受け入れに積極的な国民性、政治参加への高い意識等に関心を示した。次に、講師が背中の施術のデモンストレーションをおこなって詳しい手順を説明し、このセラピーが大切にしている「触れることによるコミュニケーション」の理念と施術の留意点について説明した。実技では受講者18名が2人1組となり施術の練習をおこなった。初対面の受講者同士も、練習を終える頃には打ち解けて、「施術をしているほうも気持ちがいいですね」「気分がスッとした」という声も上がった。

3. 総括

講座終了後には、「帰ったら家族に施術します」、「友達同士で練習していきたい」等の声が上がり、身近な人のために役立てていただけるものと手ごたえを感じた。

「触れることによるコミュニケーション」が活発になることを期待する。



2人一組で施術を練習する受講者

(2) すみれキャリア講座

3) 銅版画教室

～おもしろくてたまらない銅版画の魅力を～

滋賀短期大学 名誉教授 前川 秀治

1. はじめに

昨年度に引き続き、今年度も初心者から経験者までを対象の5日間の銅版画実技講座を開催した。「銅版画」は、1420～1430年頃に生まれた直刻法が起源であり、長い歴史を持つ。今や銅版画に取り組む作家も多い。しかし一般的にはまだまだ馴染みが無いようだ。銅板に凹みをつくりインクを詰めて紙に刷るというシンプルな版形式である。気楽にやってみれば、おもしろくてたまらない表現の幅と奥行きとが味わえる。そのような銅版画の魅力を実感できることを目的として展開した。

2. 講座内容

「版画」「銅版画」の基本的な事柄について資料を基に解説。銅板に凹みをつくりインクを詰めて紙に刷り取ることで、予想を越えた自分独自の美の表現が出来るという体験のために、基本的な版種による取り組みをそれぞれ展開した。腐食で偶然的にできた肌合いのイメージから、ドライポイント（直接引っ搔き凹みをつくる版種）で製版と刷りで1作。次にエッチング（酸で腐食する線描の版種）とアクアチント（腐食で面の濃淡の調子をつける版種）で次の2作目を制作した。なお、経験ある方には自由に制作に取り組んでいただいた。

3. 総括

受講者数が少ないので、一人一人の想いと制作のプロセスに丁寧に添うことが出来た。なお、もう少し一緒に学ぶ仲間が多ければ、それだけ学びと喜びの幅も広がる筈であり、惜しい。

また、5日間の限られた講座で、かなりの大きさの作品で、しかも試し刷りと加筆を繰り返すなどで、随分完成度や達成感が感じられる良い作品が出来た。台風のせいで1回の日程を、受講者の都合を調整して補講した。夏の過酷な暑さや季候にも負けず講座に参加いただけたこと、受講者のみなさんの熱意と取り組みに感謝。それぞれ2点余の作品が完成出来たことを喜んでいる。目的は達成できたものと思う。

この講座を今後も続けるとして、受講者数の確保の対策や、別に子ども対象の教室開設等の可能性を検討したい。



(2) すみれキャリア講座

4) 楽しく作るパンの時間

～基礎からヨーロッパ伝統パンまで その 18・19・20・21～

生活学科 金丸 政義

1. はじめに

すみれキャリア講座の楽しく作るパンの時間は、12年目を迎える。初心に戻りもう一度基礎からしっかり学べるよう、製パン原材料の役割と製パン工程の意味を勉強する講座とした。テーマも毎回異なった形で行い、1回の講座でしっかりと学べ、楽しんでもらえるようにした。

2. 活動内容

- (1) 8月 28日（火）「フランスのハードとソフトのパン」 フォンデュ・ブリオッシュ
- (2) 8月 30日（木）「ライブレッド2種とサンドイッチ」 ミッシュブロード・パンドウセーグル
- (3) 9月 1日（土）「ヨーロッパの発酵菓子とデザート」 サバラン・ハルツァーザークーヘン
- (4) 9月 17日（日）「ウィーンの伝統的なパンと菓子」 アッフェルシュトゥルーデル・ポティツエ

3. 総括

今年度は、延べ135名の参加があり、参加者は、30代から70代までの幅広い年齢層であった。また、今年度は初めて参加された方が多く見受けられた。長年参加いただいている方や、ベーカリー塾の活動を通してご縁があった方が参加され、たくさんの参加者の方から、「今年も楽しみ」「とても楽しかった！来年もよろしく」と声をかけて頂き、この講座がとても愛されていることを改めて感じることができた。パンを通してたくさんの人のご縁を頂いていることや、喜ばせられていることは、とても嬉しく、感慨深い。今後とも、参加される方に満足して頂けるよう努力したい。



(3) こども講座

1) こどもフラワーアレンジ教室 ～サマーフラワーアレンジ～

グラティチュード flower designer 鷺崎奈美代

1. はじめに

こどもフラワーアレンジ教室も今年で8年目を迎えた。今年もひまわりを基調に夏らしいアレンジを楽しんでいただいた。

2. 活動内容

はじめに、今回アレンジするお花の説明をした。子どもたちは熱心にメモを取り、集中してお話を聞いてくれた。次にはさみの使い方を説明してアレンジメントのデモストレーションをやってみせた。子どもたちの自由な発想を大事にしたいという思いから、なるべくシンプルに基本的なアレンジにまとめた。一通り説明をした後に花材を配り、子どもたちには自由にアレンジを楽しんでもらった。材料を使いきってボリュームのあるアレンジをする子。すこしゅつたりと空間を作つてアレンジする子。かわいく小さめにアレンジする子。それぞれとても個性的で素敵なお花ばかりであった。

出来上がった作品を前の机に並べて、みんなで作品発表会を行つた。

3. 総括

今年も19名の参加があり、毎年参加してくれる方も初めての方も思い切りの良さを感じた。しかし、毎年参加し、経験を重ねている子ども達は、全体のバランスを見てデザイン構成を考えたり、花の特長を捉えて工夫する姿が見られ成長を感じることができた。

毎年お花の好きな子ども達が参加してくれるので、制作中に花が折れてもそれを大事に持ち帰るなど草花を大切に思う気持ちに心打たれる場面がある。

これからも、子どもたちの植物を大切にする気持ちに寄り添いながら、楽しいフラワーアレンジ教室を開いて行きたい。

(3) こども講座
2) こども陶芸教室
～やきもの再発見～

湖陶焼 長養窯 深田 猛

1. はじめに

私は、こども陶芸教室に、平成 27 年より携わっている。

一時の陶芸ブームといわれた頃からは少し熱も冷めては来ているが、まだまだ関心を持っておられる方も少なくないようである。

2. 活動内容

今回も、出来上がった素焼きの湯呑とお皿に、顔料釉薬（赤、ピンク、水色、黄緑、黄色）と鉄顔料による茶色、大正黒の黒、以上の七色の顔料を使って、自由に自分の気に入ったキャラクター等の図柄を考え、色付けをしてもらい、1250 度の温度で焼成した。受講生個々のイメージを基に自由に作品制作をしてもらった。

3. 総括

今日、情報化社会となって、自分の生活にアイデンティティーを確立する事の難しい時代になったといえるかもしれない。

しかし、いつの時代も哲学をする事が重要である。哲学といっても先哲の跡をたどるだけではない。手を動かし、物を作ることの中にこそ、本当の哲学があるのではないかと思っている。

十分に絵心のある方から、細かなキャラクターを小さな画面に詰め込もうとする方、また、自由奔放に顔料を塗りつける方、それぞれ力量は違うが、無形の顔料から有形の作品に成る醍醐味を少しは味わっていただけたのではないかと思っている。

これからも受講者一人ひとりのアイデンティティーの支えになるような作品作りができ、また、自分の作った湯呑やお皿を使う楽しみを知っていただき、またそういう表現、楽しみのお手伝いができるれば幸いと願っている。

(3) こども講座

3) こども書道教室（小学校1・2年生）

～硬筆の練習～

読売書法会理事 奥村 祥香

1. はじめに

小学1・2年生を対象にした硬筆講座で1年生10名、2年生1名、計11名が参加した。

姿勢や鉛筆の持ち方を正しくして、文字をていねいに書くことをテーマにした。

2. 活動内容

16文字の文章を、ノートに練習した。

姿勢や鉛筆の持ち方に注意して1字1字をていねいに書いて何回も繰り返し練習した。

力が入って姿勢が前かがみになるのを注意しながら、文字の大きさや中心を揃えて練習した。

一生懸命お手本見ながら、きれいな線がひけるようになって完成度を高めていった。

3. 総括

書いた文字は、相手に気持ちも伝わります。

ゆっくりていねいに書いて、気持ちよく、読める字を心がけて書くように願っています。



(3) こども講座

4) こども書道教室（小学校 3～6 年生）

～夏休みの課題を書こう～

読売書法会理事 奥村 祥香

1. はじめに

小学生 3～6 年生を対象にした毛筆講座で 3 年生 10 名、4 年生 10 名、5 年生 4 名、6 年生 2 名 計 26 名が参加した。

小学 1、2 年生の硬筆講座からや、3 年生から連続して受講した子供もいた。

夏休み中の講座で有るので、夏休み宿題(JA の書道作品)の練習して仕上げた。

2. 活動内容

1 回目の練習は筆の持ち方、墨の含ませ方、姿勢などを指導した。

運筆など注意して、筆に慣れてもらった。

2 回目は仕上げる為、何度も何度も前回の事を注意しながら書いた。

文字の大きさや、中心が揃い、完成度の高い作品が仕上がった。

3. 総括

真剣に取り組み、何度も書いた作品には、子供らしい豊かな表現が出てきた。

筆で書く楽しさも味わってくれた。

書道を続けて欲しいと願う。



(3) こども講座

5) こどもラボラトリー ～食べ物の不思議～

生活学科 清水まゆみ・池之内愛子・岡田 香織・豊岡 真莉

1. はじめに

こどもラボラトリーは小学生を対象とし、身近な食品を分析することで科学的な考え方ができる力を養うとともに、食べ物自体への理解を深めることを目的とした。

2. 講座内容

「食べ物の不思議」をテーマとし、今回は固まるゼリーと固まらないゼリーについて実験した。ゼリー化剤として一般にゼラチンと寒天が用いられているが、両者はまったく異なる物質であり、用いるフルーツによっては固まらない場合がある。講座ではゼリー液を作ることから始め、電子天秤で試料を秤量し、メスシリンドーで液量を測定し、ビーカーの液をガスバーナーで加熱する操作を行った。フルーツとしてグレープフルーツ、キウイフルーツ、パイナップルを用い、それぞれがゼリー化するか観察した。グレープフルーツはゼラチンでも寒天でも固まった。キウイフルーツとパイナップルは寒天では固ましたが、ゼラチンでは固まらなかった。しかし、加熱したキウイフルーツあるいは缶詰のパイナップルはゼラチンでも固まった。これらを実物で確認したのち、固まる理由、固まらない理由を解説した。ゼラチンはアミノ酸がつながったたんぱく質、寒天は单糖がつながった多糖と構成成分は異なるが、どちらも長い分子である。水を加えて加熱すると溶け、冷やすと分子が網目構造を形成して固まり、ゼリーとなる。一方で、フルーツにはたんぱく質分解酵素を含むものがある。キウイフルーツにはアクチニジン、パイナップルにはプロメラインというたんぱく質分解酵素が含まれている。これらによってたんぱく質であるゼラチンが分解されたため、固まらなかった。ところが酵素は熱に弱く、加熱すると働くなくなるので、加熱したキウイフルーツはゼラチンでも固まったのである。また、缶詰は殺菌のため加熱されており、中身の食品中の酵素は働くなくなっているので、缶詰であればパイナップルでもゼラチンで固まることになる。

3. 総括

ゼリーは家庭でも作れるが、メスシリンドーやビーカーなどの実験器具を使用したので、実験に興味を持ち、楽しんでもらえたようである。固まる理由、固まらない理由の解説は専門用語を用いることもあり、低学年のこどもたちはやや理解しにくかったかもしれないが、「酵素」などいくつかの言葉は覚えられたと感じる。今回は保護者の方々にも参加してもらい、ほとんどの参加者が親子で協力して実験を行った。今後の展開として、人体にある酵素、酵素を利用した製品を調べてみようなどの課題を投げかけたので、親子で一緒に考える機会になれば幸いである。

(4) すみれジュニアキャンパス

1) 滋賀短 Kids

生活学科 灰藤友理子・岡田 香織・豊岡 真莉・池之内愛子・中平真由巳

1. はじめに

近年、『体験活動』の必要性が謳われるようになり、実際に学校現場でもたくさんの体験活動が行われるようになっている。体験活動の役割とは、豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力などの生きる力の基盤、子どもの成長の糧となることが期待されている。

今年も体験活動を通して、自信や協調性を身に付け、お互いに関わり合う楽しさを実感してほしいと考える。楽しく活動するだけでなく活動発表も加え、自分たちの実施してきたことを振り返りそれを伝えようとすることで、知識はもちろん、自分自身の自信をもつきつかけとなるのではないかと考えた。また将来の食育を担う学生は滋賀短 Kids の活動を通して、食育、体験活動の意義や実施する難しさ、次世代につなげる大切さや教える楽しさを感じてほしいという思いを持っている。

2. 活動内容

対象は近隣の小学3,4,5年生で23名の応募があった。場所は本学の調理学実習室を利用し、活動期間は5月から2月までほぼ月に1回、合計10回活動する。

今年は前年度から引き続き参加する子どもたちが多いこともあり、調理工程のより複雑なもの挑戦した。また、品数や使用する材料を増やし、香味野菜や香辛料を使うなど子どもたちにとって新しいものに触れる機会を増やした。さらに、今回の活動発信として自分たちの取り組んできたことをチームに分かれて画用紙にまとめたり、野菜・果物クイズや乾物やスパイスを使ったおもちの作成をしたり、小さい子どもから大人まで楽しんでもらえるような形にした。この掲示物は本学の文化祭「純美禮祭」で展示し、保護者の方をはじめ、文化祭に訪れた多くの方に知っていただける良い機会となった。

3. 総括

今年は経験者が多く、対象学年が5年生まで幅を広げたことから、初めて参加する友達や、下級生に様々なことを教えたり、手伝ったり、話しかける場面が多くみられた。今まで自分のやりたいことを真っ先に主張する子が、初めての子や下級生に挑戦したことを聞いて、優先的にできるよう配慮する場面や、片付けを最後までしっかりと手伝う姿に参加した学生も感心していた。参加した学生は最初こそ子どもたちとどのよう



大きな太巻きを作る様子

に調理を進めていったら効率が良いか迷うこともあったが、回数を重ねるごとに子どもの能力や特性を観察しつつ、様々なことに挑戦できるよう段取りする力を身につけており、誰かの成長を見守ることの大切さややりがいを忘れずに、栄養士としての心構えの礎にしてほしいと願っている。

5. 大学及び自治体等との連携事業

(1) 滋賀医科大学との共催公開講座

1) 認知症と栄養

地域連携教育研究センター

1. はじめに

平成 21 年度より滋賀短期大学・滋賀医科大学との共催公開が開催され、今年で 10 年目となった。滋賀短期大学を会場とし、毎回テーマに沿って講演が行われるが、本年は午前に滋賀医科大学の講師による講演が、午後からは滋賀短期大学の教員と滋賀医科大学の管理栄養士による調理実習が行われた。

2. 講座の概要

平成 30 年度は、『認知症と栄養』をテーマとして、平成 30 年 7 月 14 日（土）に実施した。

1. 講演の部

滋賀短期大学 3 号館 SUMIRE ホール（311 教室） 午前 9 時 30 分～午前 11 時 30 分

「認知症を基礎から学ぶ」 滋賀医科大学医学部 神経内科 講師 金 一暁 氏

「認知症予防を食事から考える」 滋賀医大病院 栄養治療部 管理栄養士 高岡 あずさ 氏

2. 調理実習の部

滋賀短期大学 3 号館 調理実習室・試食室 午前 11 時 30 分～午後 3 時

「地中海+和で認知症予防に挑戦！～魚を中心にバランスが基本～」

滋賀短期大学 生活学科 教授 原 知子 氏

滋賀医科大学医学部附属病院 栄養治療部 管理栄養士 仲川 満弓 氏

3. まとめ

金氏は、正常な物忘れ（健忘）と病的な物忘れの区別、認知症は病名ではなく状態であり認知機能の低下を来す疾患はたくさんあること、治療可能な認知症もあることなどについて話された。

高岡氏は認知症予防について、ビタミン・カレー・魚・食事パターンの 4 つの観点から解説され、病気を予防し健康に過ごすためには、様々な食品をバランスよく食べることが、認知症に限らず大切であることを強調された。

今年のテーマが「認知症と栄養」と、我々の生活に身近で関心度の高い内容であったので、例年になく参加者が多く、皆真剣に聴講されていた。また質疑応答も時間が足りない程の多くの質問や意見が寄せられた。

午後からの調理実習は、グループに分かれ、原知子教授（生活学科）や中川満弓管理栄養士の指導と、生活学科の教員と学生の補助のもと、参加者は皆、楽しく熱心に実習に取り組み、出来上がった食事を和やかな雰囲気の中で試食した。

アンケートでは、次年度も生活に身近な内容をテーマとする講座開催の希望が多かった。

(1) 滋賀医科大学との共催公開講座 2) 認知症予防を食事から考える

滋賀医科大学医学部附属病院 栄養治療部 高岡あづさ

1. はじめに

現在、認知症予防について様々な内容がメディアで取り上げられている。食事に関する研究報告をまとめ、正しい知識を市民に取り入れていただけることを目指して講演を行った。

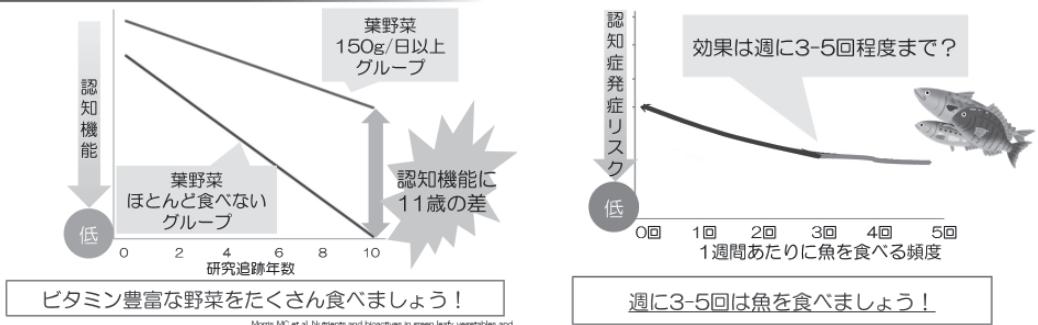
2. 活動内容

近年の報告から、ビタミン・魚・カレー摂取による認知症予防の有用性を提示した。また、どのような食習慣が認知症予防につながるのか、以下のスライドを用いて紹介した。いずれもアルツハイマー型認知症だけでなく、脳血管性認知症も考慮しながら説明を行った。

ビタミン豊富な野菜を食べる意義



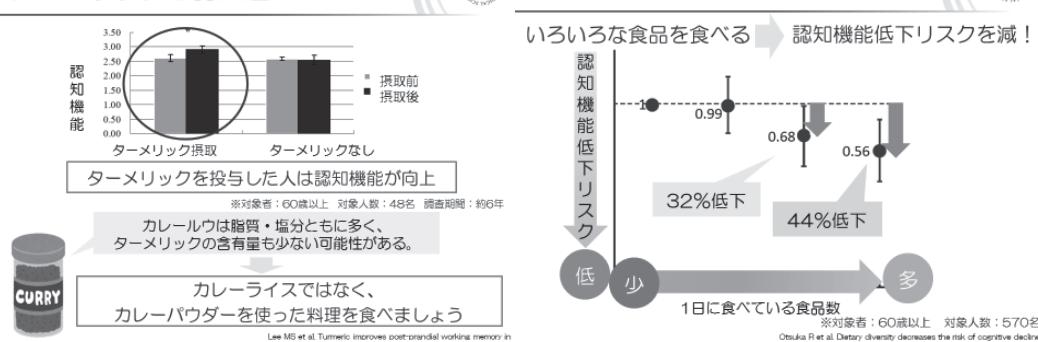
魚は食べれば食べるほど効果的？



ターメリックと認知症



様々な食品を摂ることの重要性



3. 総括

認知症は未だ治療・予防方法が確立されておらず、市民の関心の高い疾患である。現状で明らかとなっている情報を、管理栄養士の視点から発信することは、大変重要であると感じた。

(1) 滋賀医科大学との共催公開講座

3) 地中海+和で認知症予防に挑戦！

～魚を中心にバランスが基本～

生活学科 原 知子・滋賀医科大学 仲川 満弓

1. はじめに

今年度の滋賀医科大学と本学の共催公開講座は認知症予防をテーマとして実施された。午前の講演の内容とあわせて実践に役立てていただくという目的で、提案メニューの調理実習を行った。認知症予防の期待できる献立という難題であったが、地中海食的な内容の食事が認知症予防に期待ができるという報告があることから、地中海食の特徴を和風にアレンジしたメニューを提案、調理実習を実施した。

2. 実習内容

昼食一食分の食事について実作していただいた。食べ物の通則としてこれを食べていれば大丈夫というようなものは存在しない。認知症予防のための料理や食品においてもエビデンスはいまだ少なく、地中海食で使用されている内容の食材を使用し、脂質の質、食事全体のバランスが重要であるという基本を踏襲した。さらに、料理ということで、食事の成分の側面から、検証は明確でないが、認知症に効果があるといわれる食材を利用した。また、「料理をする」という手先を使う・段取りを考えて作業を組み立てていく、という側面から管ごぼうを作ったり、冬瓜を薄く切ってみたりという調理作業を取り入れ、次のような献立とした。



鮭のコーンフレーク揚げ

豆のあえ物

雑穀ごはん

ターメリック卵焼き

冷やしとろろ

凍り赤こんにゃくと高野豆腐

たこのサラダ

(チアシード、えごま油使用)

パプリカのお浸し

ナスの煮びたし

ヘルソノンを含むヤマブシタケを使用したボタン鰯の吸い物。和食に入ってきにくい乳製品を使用したデザートとしてヨーグルトのミルクゼリーと季節の果物。

地中海食での疫学データはあるが、日本人を対象としているものではないので、地中海食の特徴をふまえて和に落とし込むこととした。魚、豆、野菜、海藻、きのこ、オリーブオイル、乳製品、果物、と使用食材の食品群が多岐にわたるように配慮し、タンパク質・脂質・炭水化物の比率



は約 20 : 25 : 55 で炭水化物目標は 50~55%、一食分のエネルギーは 580kcal+デザート 100kcal であった。

3. 実施状況

当日の参加者は 34 名。補助学生、生活学科教職員が加わり、地域連携教育センターの教職員の方々も誘導等していただき、実習室・試食室は大変せまく感じられた。

午前の部の質疑応答が大変活発だったため 30 分遅れで、まずは参考レシピの一つ、スタッフが準備したサラダを召し上がってからスタート。 手慣れた方が多かったため、

時間が押しながらも料理完成。「手慣れた」とはいえ、管ごぼうや、冬瓜の色だし処理等、普段の家庭料理では行わない工程もあり、「これでいい?」「きれいにできていますね」など確認しつつ進行した。質問や確認などで作業も会話も活発であった。



和食弁当の特徴として多くの品数があり、班ごとに分担して調理していただいた。一人で一度に作るのは大変だが、難しい作り方のものは少ないので、ご自宅で一品プラスするときの参考にしていただければ幸いである。調理作業が多くなったにもかかわらず、参加者、補助学生、スタッフのおかげで、無事完了・試食となり、試食中に仲川先生から食事内容の特徴説明があった。参加者の積極的かつ終始和やかな雰囲気によって、本当に楽しいひと時になった。

4. まとめ

誰しも認知症への一抹の不安を感じてしまう。レビー小体型の認知症では投薬により改善するケースもみられるなど今後研究が進んで安心できる時代がくるとは信じている、が、まだまだ認知症予防は大変難しいテーマである。実証データのないものが多いが、発症してしまう前の「脳活」を実践することは、その時その時を充実して生活する上でも大切である。スーパーフードといわれるような食材を「時に」使用して、「新しいことに挑戦する」ことも認知症予防には必要かもしれない感じている。科学的観点から食事内容について考えると、結局は 3 食をきちんとバランスよく食べ、何かに偏らない、という基本をコツコツと実践することが認知症予防だけでなく、健康を保つためのポイントだといえる。そういう日々の食事作りを楽しめるように、実習講座を活用していただけたら幸いである。

後になりましたが、この場をお借りして、参加者のみなさま、滋賀医科大学医学部附属病院栄養治療部のみなさま、オリーブオイルをご提供いただきました J-オイルミルズ様、滋賀短期大学のスタッフ、学期末にもかかわらず試作に協力してくださった応用栄養学実習履修者、計画・進行・運営などのお世話をいただいた皆さんに謝意を表します。

(2) 滋賀大学教員免許状更新講習

幼児教育の原点を学ぶ

1) 「根っこ」を育む保育・幼児教育の源流

幼児教育保育学科 北後佐知子

1. はじめに

幼稚園（Kinder garten）を創設したフレーベルは、幼児が育つ場所を「学校」ではなく「庭（garten）」と名付けた。そして保育者を「園丁」（Gärtner）のような存在だと考えた。幼児一人ひとりが自己の可能性や個性を生き生きと發揮できるよう、植物でいうところの陽の光や水、土や養分、そしてそれを整える存在が重要だからである。本講習は、現場の先生方の日々の保育、先生方の子ども観や保育観を保育幼児教育の源流から改めて意味確認するものであった。

2. 活動内容

講習では、まず保育・教育という言葉の成り立ちに注目した。そしてフレーベル思想および保育・幼児教育の変遷をてがかりに保育・幼児教育の基本原理を確認した。最後に現代社会における保育・子育ての現状と課題と保育・幼児教育の未来についてディスカッションを通して検討した。ねらいは、次の二点である。第一に言葉の成り立ちや保育・幼児教育の変遷を手がかりに、その原点を理解することである。第二にフレーベルが幼児の育つ場所を「Kinder garten」と名付けた意味について理解し、現代社会における保育・幼児教育との関連について具体的に考察することである。これらのねらいを達成するために、まずは受講者が自らの幼児期の記憶をたどるためのワークを行った。自らの幼児期と向き合うことを幼児理解の出発点として位置づけながら幼児理解を深めるためである。次に、講習内容をふまえて、幼児の「根の育ち」について各自考査した。最後に子どもの姿から見える保育・幼児教育の諸課題を共有しつつ、ディスカッションを通じて変わりゆく時代における保育・幼児教育の原点とは何かをグループで意見交換した。

3. 総括

講習では次の四点を幼児教育の源流として確認した。1. 保育・幼児教育は、人間が生きる上で必要な知識・技術の習得を根底的に成立させるための営みであること。2. 人間が生まれるときの、「未熟さ」や「弱さ」は人を信頼し、共に生きる存在であること、自らの内に成長力をもつ存在であることの証であること。3. 「Kinder garten（幼稚園）」の創設者であるフレーベルは幼児を植物の種子の核にたとえ、幼児一人ひとりが自己の可能性や個性を生き生きと發揮できるよう、植物でいうところの陽の光や水、土や養分を整える存在を保育者だと考えたこと。4. 保育・幼児教育は長年、乳幼児とかれらにもっとも身近な大人の立場から社会の諸課題を最前線で受け止めつづけていること。

試験の答案からも各受講者がそれぞれに深く講習内容を受け止めてくださったことがうかがえた。特に自身の幼児期をふりかえりながら改めて幼児理解を深めるディスカッションの際は受講された方々の表情がいきいきとした表情が印象的であった。

(2) 滋賀大学教員免許状更新講習
幼児教育の原点を学ぶ
2) 学びをつなぐ幼小連携について

幼児教育保育学科 久米 央也

1. はじめに

今回改訂された幼稚園教育要領では、幼小連携の重要さが明記された。また、小学校現場では、今だに小1プロブレムが課題となっている。ここでは、幼稚園を卒園した子どもが、スムーズに小学校生活に移行するために、どのような連携をし、どのような接続カリキュラムを編成すればいいのかについて学びを深めていく。また、その中で、幼児教育と小学校教育の違いについて学び直し、幼児教育の原点や「よさ」について再発見していく。

2. 講習内容

(1) 幼児教育と小学校教育の違いについて

改訂幼稚園教育要領と学習指導要領から「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と小学校で育てたい姿の関連性について解説する。また、「幼稚園教育において育みたい3つの資質・能力」における小学校との連続性について具体的な例を基に解説をする。さらに「主体的・対話的で深い学び」における小学校との連続性について「幼稚園教育要領」を読み解く中でその重要性について学ぶ。

(2) 幼児教育と小学校教育の学びの相違点と共通点について

小学校から見た幼児教育の「よさ」について、幼児教育と小学校教育「心が動く保育」と「心が動く授業」の活動例を基にして解説する。

(3) 幼稚園と小学校との連携について

今日の日本の教育における幼小連携のあり方と問題点について説明する。また、これから連携のあり方について「学びでつなぐ連携、接続」「保育参観と授業参観の大切さ」を中心に講義する。

(4) 幼稚園と小学校 接続カリキュラムに向けて

幼稚園5歳児における「アプローチカリキュラム」小学校1年生における「スタートカリキュラム」について現状と課題について触れ、今後の理想とするカリキュラムについて学ぶ。

3. まとめ

幼稚園と小学校の相違点と共通点を「学び」に注目して再発見することから連携は始まる。そのためには、お互いの保育・授業を参観することで「行事」の連携から「学び」の連携に発展することが大切である。100名の受講者であったが、保育現場で幼小連携の推進リーダーとなつていただくことを期待したい。

(3) 滋賀県保育協議会との連携講座

1) 平成 30 年度滋賀県家庭的保育推進事業の基礎研修

幼児教育保育学科 前川 順子

1. はじめに

家庭的保育は、保育所を利用する子どもや保護者が持つのと同様のニーズに対応していくことが求められる。そこで、保育を受ける小さな子どもの命と健康、発育、発達を保障するためには家庭的保育の「質」を低下させることがあってはならない。したがって基礎研修が重要となる。

家庭的保育に期待される待機児童対策は重要であるが、それだけでなく、低年齢の子どもの保育のあり方として、家庭的環境で、個別性に配慮しながら、丁寧な保育を行うことの意義も大きいと考えられる。

2. 研修内容

7月 15 日 (日)	オリエンテーション	7月 29 日 (日)	家庭的保育者の職業倫理と配慮事項
	家庭的保育の概要		子どもの虐待
	乳幼児の発達と心理	8月 26 日 (日)	見学実習オリエンテーション
	食事と栄養		気になる子どもへの対応
	小児保健 I		家庭的保育の環境整備
7月 29 日 (日)	小児保健 II	9月 1 日 (土)	保護者への対応
	家庭的保育の保育内容		家庭的保育の運営と管理
	安全の確保とリスクマネジメント		グループ討議

3. 総括

家庭的保育者基礎研修での最後のグループ討議では、家庭的保育の実践に向けて、家庭的保育の理解を深め、不安や問題点について話し合い、その解決策を見いだせるようにした。

そこで、グループ討議の議題として事前にテーマを出し、グループ内で司会や記録など役割分担をしてスタートした。

- ① 開かれた保育について、情報提供の他にできること
- ② 安全を確保するための具体的な留意点とは。
- ③ 子育ての悩みについて、プライバシーに配慮すれば近隣の人に相談しても良いか。
- ④ コミュニケーションを広げ情報を共有するシステムづくりとは。
- ⑤ アタッチメントが形成されにくい子どもについて。

さまざまな意見、考えが活発にバズセッションのように話し合われた。

また、全体での意見交流では、他のグループの意見を聞くことができ、子どもにとつても保護者にとっても安心して預けられる家庭的保育室でいたい等の感想をいただいた。

(4) 地域移動講座

1) 地域移動講座 in 守山

幼児教育保育学科 柚木たまみ・松井 典子

1. はじめに

平成 29 年度の地域移動講座 in 守山は、守山市教育委員会と滋賀短期大学の共催により平成 30 年 1 月 9 日（火）エルセンターにおいて開催された。守山市内の幼稚園、保育所、認定こども園、小規模保育施設等の職員 81 名を対象として、「ひろがる音楽あそび・音楽表現」をテーマに講義とワークショップを行なった。

2. 講演内容

本講座は前半が講義、後半がワークショップという二部構成であった。まず前半において、音楽・音楽(表現)活動の概念と特性および可能性について講義した。後半には、保育の現場における音楽表現活動に展開する活動例を掲げ、身体表現や楽器を使用したワークショップを実施した。

前半の講義においては、日常生活における人間の心身と音楽の密接な関係を述べ、音楽表現活動が五感の発達に有効に関わることのできる可能性を述べた。また、後半のワークショップの内容への繋ぎとして、リトミックの概要を述べた。主に、リトミックの 3 要素（即時反応、ソルフェージュ、即興）と、リトミックによって養われる力について、実践例を交えて講義した。

後半のワークショップでは、まず受講者にリトミックを体験してもらった。保育の現場ですぐに実践が可能な方法で、いくつかの活動例とそのヴァリエーションを示した。それは、ピアノという伴奏楽器により、即興の音作り、速度の変化、拍子の変化等少しの工夫を加えることの提案であり、音楽表現遊びの幅を広げるヒントであった。また、通常の枠に捉われない自由な発想を、保育における音楽表現遊びにおいて改めて意識することを進言した。

最後に、「音環境」について提言した。子どもの聴覚の発達と特性を考慮した保育を行う環境作りの重要性を述べ、講座を終了した。

3. まとめ

講座終了後のアンケートでは、講座内容は充実していた（95%）、講座内容は理解できた（92%）、講座内容は活用できそうだ（96%）という回答をいただいた。また、自由記述欄では、「実践できそうな内容ばかりでよかったです」「楽しく学べた」という声をいただいた。これは、ワークショップを教員 2 名で行なったことによりデモンストレーションのモデリングがわかりやすく提示できたことに起因すると考えられる。

音楽表現の方法は様々である。子どもたちが自由に自分を表現することができるように、個性や特性を生かしながら、保育者一人ひとりがのびのびと、ともに表現する喜びを分かち合える活動を目指し、今後も地域と協働していきたい。

（文責：柚木 たまみ）

(4) 地域移動講座

2) 地域移動講座 in 長浜

幼児教育保育学科 前川 順子

1. はじめに

地域移動講座 in 長浜が平成 30 年度 6 月 29 日（金）に長浜市役所に於いて開催した。この講座は長浜市教育センター自己啓発研修との連携のもと、幼稚園、保育所、認定こども園研修会の乳幼児講座として「自然の不思議さに触れ体験する」をテーマに講演とワークショップを行った。

2. 講演内容

(1) 環境を通した教育

教育及び保育の基本的な考え方のひとつとして「環境を通した教育」がある。子どもの本来持っている「知りたがり屋」「好奇心旺盛」という能動性を重視して、「どうなってるだろう」「おもしろい」「もっとやってみたい」という環境から刺激を受け、自らかかわり、かかわりながら試行錯誤を繰り返し、そうすることで生活に必要なあらゆることを身に付けていく。そこで、自然に心を揺さぶらせ心をおどらせる自然の不思議さは、子どもたちが動く心（好奇心からの出発）で五感を働かせ、そして心が動き感性が育ち、感性から知性は、自然の中で「どうしてこうなっているのだろう」と思考力を働かせ、もっと知りたいと真実を探求していく。子どもにとっては「環境」は保育者に代わって保育する存在でもある。このことは、四季の移り変わる日本の自然ほど、豊かに感覚を刺激し、深い知性を育んでくれるものはない。

(2) 季節の「変化」に気づく

- ・砂場の日よけ（ブドウ・キウイ・藤の花）夏には葉が茂り日よけになる、冬には落葉して暖かな日差しが差し込む。
- ・影踏みは、季節や時間によって影の長さが違う。
- ・桜の木は、花だけでなく、初夏の青葉の美しさ、紅葉する面白さ、落葉後の寒々とした様子、蕾が膨らむ期待など。

一年を通して「変化」に気づく感性を育てる「何か違う」「なぜ」「これからどうなる」といった好奇心を高め、季節に対する感覚を養う。

3. まとめ

今回の地域移動講座では、後半実際に自然物を使った五感を通した遊びを取り入れることで、普段何気に関わっていることが、改めて「触って」「匂って」自然の不思議さを体験できた。様々な活動に、まずやってみて色々な事に気づける、そこから工夫したり、子ども同士のやり取りが始まり、楽しくなり、子どもたちの力が引き出せることを伝えた。

(4) 地域移動講座

3) 地域移動講座 in 高島

幼児教育保育学科 浜崎 由紀

1. はじめに

平成 30 年 7 月 30 日（月）に高島市安曇川ふれあいセンターにおいて地域移動講座 in 高島を開催した。高島市と共に、高島市保育園・幼稚園・認定こども園等職員研修会として「絵本に親しむ子を育てるために」をテーマに講演した。教職員の先生方約 50 名が参加して下さった。

2. 講演内容

(1) 言葉のキャッチボールと語彙数・語りの重要性

はじめに、現代の子どもたちは、乳幼児のころから電子メディアに囲まれた生活をしており、そういう環境の中にいる子どもたちが絵本を親しむためには、まず、大人と子どもが目と目を合わせながら、言葉を交わし、応答的に関わることの重要性をお話した。応答的な関わりによって、気持ちや情緒の交流が深まり、コミュニケーションへつながっていく。長い子育ての文化の中で我々の祖先はわらべ歌を歌い、語り、子どもと触れ合いながら子どもを育ててきた。子どもは愛されているという安心感の中、自尊感情も育っていく。そのような中でこそ、絵本を楽しめる基盤となることをお伝えした。

(2) 絵本の世界—絵本の楽しみ

絵本とは何か、絵本メディアの特性について説明した。絵本は、絵と言葉と本という形態からなる視覚メディアであり、ページめくりによってストーリーが進行する。絵本は絵、文、本という形態に仕上げた人もすべてが作者であり、総合芸術であることをお伝えした。絵本は、絵も文も語つており、子どもは保育者の言葉を聞きながら絵も読んでいる。背表紙、表紙、見返し、扉、本文、後ろ見返し、裏表紙の全てに楽しめる要素があり、芸術作品といえる。保育者は、文化や芸術を子どもたちに伝えることも担っており、選書は重要であることをお伝えした。

(3) 絵本の読み語り

「絵本を読み語る」無形文化財としての絵本の役割についてお話した。絵本は、必ず子どもの方を見て読まなければいけないという固定観念を横に置き、子どもたちに物語に集中して絵本を楽しんでほしいのか、それともクラス全体でコミュニケーションを取りながら絵本を楽しんでいくのか、保育のねらいや目的によって絵本の読み方を変えていく必要があることを方法と共にお伝えした。

3. まとめ

大人が子どもに一方的に絵本を「読んで聞かせる」のではなく、子どもが主体的に物語にかかわり、自ら楽しもうとする力を大人が信じることが大切である。子どもが心地よいと感じられる時間を大切にしながら絵本を共に楽しんでいただきたい。今回は、時間の都合上、演習の時間を取れなかつたため、保育者の方々の要望に応えられなかったのではないかと思われる。今後は、演習の時間も取り入れ、具体的に学べる機会を提供できればと思う。

(4) 地域移動講座

4) 地域移動講座 in 甲賀

幼児教育保育学科 浜崎 由紀

1. はじめに

平成 30 年 11 月 29 日（木）、甲賀市碧水ホールにて地域移動講座 in 甲賀を開催した。甲賀市と共に、甲賀市幼稚園・保育園・認定こども園・家庭的保育室等職員研修会として「乳幼児のことばを育む保育者の役割」をテーマに講演した。

2. 講習内容

はじめに、現代の子どもがおかれている環境について参加された先生方と問題点を共有した。一点目、子どもは乳幼児のころから新奇性の高い強い刺激を一方的に受けて過ごしていること、二点目、テレビ文化や商業文化が生活に浸透し、乳幼児のころから消費社会に影響を受けながら育っていること、三点目に、経験を奪う生活の変化等により家庭での子どもの体験に偏りが生じていることをあげた。他方、園には豊かな人との関わりの中で生活を共にし、遊びやけんか、子ども自身がつくりだす遊びや場を保障している。園は子どもの育ちを守る大きな役割を果たしていることをお伝えした。

講習内容は、II 部に構成し、I 部では「子どもが言葉を獲得するために保育者が知っておきたい基礎知識」について、II 部では「具体的な保育者のかかわり」についてお話をした。

I 部では、言葉の獲得の前のアタッチメントの大切さについてお伝えした。アタッチメントを基盤として乳幼児は、周囲の人と目を合わせ、声を交わし合い、表情やしぐさをやりとりして、身体であれこれ自分の思いを表現する。まだ意味をなさない声をやり取りして、ことば以前のコミュニケーションを繰り広げている。その中で周囲の人の声が意味を持ち、自分の声が言葉になっていく過程について基本的な知識を共有した。I 部の後、2 分間の Thinking Time をとり、I 部の講義内容を先生方にまとめていただき、2 分間で隣の人に伝えるというワークを交互に行った。2 分で考え、話すことは意外に難しいが、積極的に取り組んで下さった。

第 II 部では、保育者の子どもへの具体的なかかわりについてお話をした。第一に、保育者は子どもの存在を肯定することの大切さをお伝えした。例えば、顔の表情は笑顔で、相手への関心を伝え、やる気を引き出す言葉や行動等に気をつける等である。「ネガティブな言葉」を「ポジティブな言葉」に変えて子どもに話すワークや「相手の気持ちや考えをありのままに受け入れる言葉」について考えるワーク等を取り入れながらお伝えした。私たちは、つい人の弱点に目が行きがちであるが、子どもを見るときは、弱点を見るのではなく、強みを見てそれらを認めることの大切さもお話をした。

3. おわりに

開始時刻が 18 時からであったが、100 名以上の教職員の方々にご参加いただいた。先生方のご要望に応えられたか心もとないが、日々の保育に少しでも役立てていただければ幸いである。

(4) 地域移動講座

5) 地域移動講座 in 近江八幡

幼児教育保育学科 浜崎 由紀

1. はじめに

平成 30 年 12 月 12 日（水）近江八幡市総合福センターにおいて地域移動講座 in 近江八幡を開催した。近江八幡市と共に、近江八幡市幼稚園・保育園・認定こども園・家庭的保育室等職員研修会として「保育のなかで子どもが絵本を楽しむために～保育者が心がけておきたいこと～」をテーマに講演した。

2. 講演内容

(1) 子どもが絵本を楽しむ前に

はじめに、現代の子どもが置かれている文化状況についてお話し、「絵本の読み聞かせ」以前のアタッチメントやコミュニケーションの大切さについて述べた。保育における「絵本の読み聞かせ」は、保育者と子どもとの信頼関係の上に成り立つものであり、大人からの一方通行の発信ではない。子ども自身も好奇心をもって能動的に関わりながら絵本を楽しんでいる。特に乳児期のころは保育者と関わりながら絵本を楽しみ、少しき大きくなると、言葉の意味を理解し、豊かな物語体験をする。豊かな物語体験をするには、子どもは乳幼児期からの直接的な体験を存分にし、積み重ね、言葉の持つ意味の深さ、奥行きを知ることが大切である。

(2) 絵本の基礎知識

保育者は保育のプロとして保育教材である絵本メディアの特性を知り、選書し、子どもに手渡す役目があることをお話しした。絵本は、絵と言葉と本という形態からなる視覚メディアである。また、絵や文、本という形態に仕上がるまでに多くの人の手によって創作された総合芸術であり、文化財である。絵本にはメッセージ性があり、選書する絵本によって子どもの心の成長にも大きくかかわる。だからこそ、何を選び、何を子どもたちに伝えるのか、保育者が保育のねらいや目的をもって子どもたちに手渡していく大切さを強調した。

(3) 子どもへの絵本の読み聞かせ

保育者は、子どもに絵本を読み聞かせる際、保育のねらいをもってその読み方を選択する必要がある。子どもに物語に集中してほしいと思えば、保育者が絵本に集中すればよい。子どもが絵本に集中しているかどうか、読み聞かせの最中に保育者が子どもを見るために視線を向ける必要はない。保育者の中には、子どもの様子を直接見なくても肌で感じながら子どもが絵本を楽しむ様子を捉えている先生もおられ、子どもたちはとても良い環境で絵本体験をしていることが窺えた。

3. まとめ

参加者の中には卒業生の姿も見られた。また、講演後に声をかけていただいたり、子どもとの絵本の楽しみ方について尋ねて下さる方もいた。今回は、図書館や子育て支援関係者も参加して下さった。日々の保育や現場で少しでもお役に立てれば幸いである。

(4) 地域移動講座

6) 地域移動講座 in 東近江

幼児教育保育学科 深尾 秀一

1. はじめに

平成 30 年 12 月 17 日火曜日、15 時から 17 時まで、東近江市長峰幼稚園において、東近江市こども未来部幼児課幼児教育センターとの共催講座として、地域移動講座が開催された。

テーマを『身近な素材でつくる 制作あそび —平面から立体へ—』として演習を含めた講座を行った。参加者は 33 名で、幅広い年代の参加者があった。

2. 内容

1) 領域表現のになうものと活動の実際

プロセスの重要性と子どもの探求心、および教材工夫の大切さについて

2) 平面から立体へ

美の秩序 構成美の要素 構図と空間性について

3) 粘土の種類とその表現の可能性

様々な市販紙粘土、寒天粘土、土粘土と 手作り新聞紙の粘土について

4) 作品の展示方法について

実際の壁面構成や展示から、より良い展示方法や子どもの作品への援助のしかたについて

5) 身近にあるものを使っての、立体作品制作演習

動きと表情について、～〈ずらし〉の視点から～

3. まとめ

今回、参加者が非常に熱心に研修に参加しておられたことに感銘を受けた。個々の指導者が日々問題意識をもって子どもたちへの指導に当たっておられることが容易に想像できた。

身近なものを使った制作という今回のテーマの中で、静止的になりがちな展示からの脱却の一方で、基本軸をずらすことによる表情や動きの出し方を体験していただいた。また、現場で使われている様々な素材を工夫することにより、子どもたちの造形表現の世界がより一層広がることも理解していただいたのではないだろうか。

実際に指導者が造形体験することによってより、子どもたちへのアプローチや援助の在り方が変わるはずである。今回の研修をもとに、子どもたちの生き生きとした造形活動が各園において展開されることを期待したい。

(5) 図書館連携講座

1) 第3回滋賀短期大学図書館連携講座 in 浜大津

幼児教育保育学科 浜崎 由紀

1. はじめに

平成27年度から始まった図書館移動講座は、今年度4年目を迎えた。市民の方を対象とし、本学と大津市立図書館との連携で進められている本講座は、本学教員の専門性を生かした内容で進められている。筆者は、一昨年から関わらせていただき、平成28年度は和邇図書館、平成29年度は北図書館で講座を務めさせていただいた。今年度は、6月9日（土）に浜大津の大津市立図書館において「絵本と子育て」をテーマに講演した。

2. 講演内容

講演では、まず子どものための絵本が生まれたのは、17世紀で、長い歴史の中から見れば、ほんの300年ほど前に誕生したメディアであることを説明した。子育ての文化は人類が始まって以来、連綿と受け継がれているものであるが、絵本がなかった時代、子どもは絵本がなくても育っていた。それでは、現在の子育てにおいて、絵本がなくても子どもは育つかという問い合わせてくる。絵本が子育てに必要なのかについて問題提起し、なぜ今、「子育てに絵本を！」と伝えるのかについてお話をした。

現在の子どもを取り巻く環境は、生まれた時から電子機器に囲まれている。赤ちゃんでさえもベビーカーに乗せられながらスマートフォン等の電子機器を手にしている姿を日常的に見かける。あるいは、親がスマートフォンに夢中になると、子どもが親を見つめていても子どもの様子に気がつかず見過ごしてしまうこともある。本来、乳幼児は機械よりもまず、人と人との関わりが重要である。目と目を合わせながら、人と関わり、相互性を育てる時期である。子どもが自分の欲求を言葉にならない言葉で発し、それを大人が汲み取り、言葉で返していく。そういった、応答的な関わりが、情緒の交流となり、言語獲得の基盤となる。指差しができるころには、大人とモノを指さしながら情緒や感情を共有することができ、ものには名前があることも実体験を通して学んでいく。

電子メディアを通してバーチャルな体験ができる現代において、今後ますます子どもにとって直接体験が必要である。絵本は、ページをめくり（触覚）、絵を見（視覚）、語る声を聴く（聴覚）等、五感を働かせながら大好きな大人と絵本を読んでもらう体験をする。安心感の中で読んでもらった絵本体験は、自尊感情を育み、子どもにとって生きる力となる。だからこそ今の時代には子育てに絵本が必要であると言える。

3. 総括

会場には、読書ボランティアで活動されている方も参加されていた。是非、子育て中の親子に絵本の楽しさ、親子で読むことの大切さを伝えていっていただきたい。

(5) 図書館連携講座

2) 第4回滋賀短期大学図書館連携講座 in 浜大津

ビジネスコミュニケーション学科 堀池喜八郎

1. はじめに

2018年11月17日（14:00－15:30）、大津市立図書館（本館）において「森鷗外と高木兼寛にまつわるビタミンの話—ヒトはこれだけ食べれば健康に生きていける」という題目で講演した。

講演は、配付資料（A4版20頁）にもとづき、図書を紹介しながら、板書中心で行った。

2. 講演内容

(1) 中心静脈栄養法（完全静脈栄養法）と栄養素の分類

中心静脈栄養法とは、人体に必要なすべての栄養素を含む高張な輸液剤を大静脈（右心房）に点滴で投与する方法である。その成分表を示して、ヒトが生きていくために食べなければならない栄養素の種類とその量はわかっていて、これらは普通の食事から得られることを解説した。

(2) ビタミン

ビタミンの定義について解説した。ビタミンは全部で13種類であるが、アメリカでは、ビタミン様作用物質のコリンをビタミンB群の一つとして扱い、摂取量を定めている。

(3) ビタミン研究における日本人の活躍

ビタミン研究は脚気の研究から始まった。そこには高木兼寛・堀内利国・鈴木梅太郎・牧野堅のような日本人が深く関わった。

高木兼寛は、1884年（明治17年）に軍艦筑波の乗組員を対象とした栄養実験航海の結果から、ヒトの脚気が感染症ではなく食事内容の不備によって起こり、食事（海軍兵食）の改善によって治癒できることを初めて疫学的に実証した。イギリスの南極地名委員会は高木のこの業績を高く評価し、南極大陸に「タカキの岬 Takaki Promontory」という地名をつけ、称えた。

一方、堀内利国は陸軍軍医であり、同じ頃、米麦（大麦）混合食によって脚気の治療や予防ができる事を確認し、麦飯支給を推進して成果をあげた。

また牧野堅は、ビタミンB₁の化学構造はピリミジン環とチアゾール環がメチレン基（-CH₂-）を介して結合しているという正しい構造式を提案した。この論文は2ページという短い論文であるが、ビタミン発見史には欠かせないもので、繰り返し引用されている。

(4) 森林太郎（森鷗外）の反撃

脚気の治療法と予防法を疫学的に証明した高木兼寛ら（麦飯支給）に対して、森鷗外らは激しく反発反論した。この脚気問題に対する鷗外の言動や彼の性格について論じた本を数冊紹介した。

3. まとめ

五大栄養素のうちビタミンについて、その定義・発見の歴史・日本人の活躍について解説した。特に高木兼寛と森鷗外についてお話しした。また健康食品や栄養補助食品の有効性についても少し触れ、ふつうに食べていれば、いわゆる健康「食品」の摂取は不要であることも述べた。

(5) 図書館連携講座

3) 第8回滋賀短期大学図書館連携講座 in 和邇

生活学科 清水まゆみ

1. はじめに

大津市立和邇図書館教育講座として、2018年8月4日に講演を行った。本講座は近隣住民を主とした一般市民を対象としており、「食べ物と健康～たんぱく質～」と題し、生命維持、健康の保持・増進において重要な物質であるたんぱく質について解説した。

2. 講演内容

栄養素とは生命維持、生活活動のために食べ物から取り入れる物質であり、5種類に大別される。たんぱく質は栄養素の1つで、体内でエネルギーになる、体構成成分になる、体の調子を整えるという機能を有している。たんぱく質は約20種類のアミノ酸を構成単位とし、これらのうち9種類は体内で合成できないため、必ず食べ物から摂取しなければならない必須アミノ酸である。アミノ酸がさまざまな順序で数十個から数万個つながってたんぱく質となっており、この設計図は遺伝子上にある。このようにたんぱく質は長い鎖状であり、複雑に折りたたまれた立体構造をとっている。アミノ酸同士のつながりは強固であるが、化学的・物理的作用で立体構造は崩れやすく、崩れることを変性という。ほとんどのたんぱく質は変性前後で大きく性質が変わり、不溶化したり、消化性が変化し、酵素など生理活性をもつたんぱく質は失活する。食べ物のたんぱく質の変性は日常生活において頻繁に観察される。ヨーグルト、豆腐、ゆで卵はたんぱく質が変性した結果であり、変性前より消化が良くなり、風味も変化している。一方で、ヒト体内には2万種類以上のたんぱく質が存在すると考えられている。食べ物のたんぱく質は胃でペプシン、小腸でトリプシン、キモトリプシンなどの消化酵素により、アミノ酸1つずつに分解されてから吸収され、これらをつなぎ合わせてヒト体内のたんぱく質となる。すなわち、食べ物のたんぱく質がそのままヒトのたんぱく質になるのではないのである。食べ物のたんぱく質にはヒトのたんぱく質になりやすい良質のものと、なりにくいものがあり、これは必須アミノ酸の含量による。概して肉や魚などの動物性たんぱく質は良質であり、穀類、野菜、果物の植物性たんぱく質は良質でないものもある。このことを食品個々のたんぱく質のアミノ酸価を示して説明した。以上の観点をもとに、健康食品としてよく取り上げられるコラーゲンや酵素もたんぱく質であるので、これらの有効性についても考えてみた。

3. まとめ

生きていくうえで必要不可欠なたんぱく質について、化学的な視点から解説した。さらにたんぱく質のアミノ酸のつながりは遺伝子DNAの塩基配列に情報があることから、塩基の変化にともないたんぱく質がどうように変わるか、演習形式で確認した。たんぱく質は日常生活でほぼ毎日接しているもので、受講者の方々がたんぱく質の特徴を知ることにより、より身近なものとして捉え、健康の保持・増進に役立ててもらえればと思う。

(5) 図書館連携講座

4) 第9回滋賀短期大学図書館連携講座 in 和邇

ビジネスコミュニケーション学科 伊澤 亮介

1. はじめに

2018年9月1日、大津市和邇図書館において「日越交流小史－安南貿易と近江商人－」と題して講演を行った。

江戸時代初期にベトナムへ渡ったとされる近江商人、西村太郎右衛門についての資料はわずかしか残されていないが、当時の安南貿易の状況や日越関係について、発表者が特に関心をもっている文字や言葉の問題を軸に安南貿易というテーマを中心に考察した上で、彼の事績について考えた。

2. 講演内容

講演は以下のプログラムに従って行った。

導入：ベトナムとベトナム語の基礎知識

1. 日本とベトナム－漢字文化圏の「周辺国」
2. 日越関係概観－安南貿易以前
3. 安南貿易と近江商人

導入としてベトナムとベトナム語についての基礎知識を簡単に紹介した。第一章では、近代以前の共通の教養には漢学があり、近江商人も例外ではなかったこと、そして両国とも近代化の過程で、ともにその漢字と漢文、漢学の影響から脱する必要があったが、ベトナム語のアルファベット表記に日本人が関わっていたといった意外な繋がりがあることなどに触れながら、安南貿易以前の日越関係を概観した。

第三章では、安南貿易が行われるに至った両国の事情から、扱われた品物、使われた港などについて考えつつ、西村太郎右衛門の事績を紹介した。

3. 総括

タイトルから歴史や文化に関する内容を期待されて来られた方も多いかったかと思われるが、発表者の研究分野の関係から、漢字やチュノムなどの文字の話や言語についての話が多くなり、期待に沿えなかつた面があつたのではないかと危惧している。しかし、発表後多くの質問をいただいた。ベトナムや日越関係について関心を深めていただいたのであれば幸いである。特に、ベトナムの書道について質問された方が多く、中心として扱ったテーマではなかつたが、ベトナム独自の文化、特に文字について興味を持っていただいたことは大変うれしく、更に研究を深めていきたいと思った。

(5) 図書館連携講座

5) 第5回滋賀短期大学図書館連携講座 in 堅田

ビジネスコミュニケーション学科 金澤 雄介

1. はじめに

本講座では、「比べてわかる！日本語から見たイタリア語の表現」というテーマで、日本語と対照しながら、イタリア語の特徴について解説をおこなった。講座は2018年10月6日（土）に大津市立北図書館において、10名の受講生を迎えておこなわれた。

2. 活動内容

イタリア語の概要について紹介をおこなった後、イタリア語の表現の特徴について、日本語と対照しながら解説した。その主な内容は以下の通りである。

(1)「行く」と「来る」にまつわる表現：日本語は話し手の視点・場所から「行く・来る」を表現するのに対し、イタリア語は聞き手の視点・場所から「行く・来る」を表現する。

(お店で店員を呼んだとき) 日：すぐ行きます。 イ：Vengo subito. 「すぐ来ます」

(2) 無生物主語の表現：日本語は基本的にヒトが主語になるのに対し、イタリア語はモノやコト（無生物）が主語になることが多い。

日：私はピザが好きです。 イ：Mi piace la pizza. 「ピザは私の好みです」

(3) 日本語は「なる・ある」の言葉、イタリア語は「する・持つ」の言葉：日本語は主語を際立たせず、「なる・ある（いる）」と表現するのに対し、イタリア語は主語がある行為を「する・持つ」と表現する。

日：マリオには3人の子どもがいます。 イ：Mario ha tre figli. 「マリオは3人の子どもを持つ」

(4) 語順と「言いたいこと」：日本語は「言いたいこと」に「が」をつけるのに対し、イタリア語は「言いたいこと」を最後に言う。

(あなたではなく) 日：私がやります。 イ：Lo faccio io.

日本語とイタリア語は「話題」をはじめに言う。また日本語は「話題」に「は」をつける。

日：この本は、私が去年書きました。 イ：Questo libro, l'ho scritto l'anno scorso.

3. 総括

受講生の皆さんからは多くの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。この講座で、ことばの多様性を探る面白さを伝えられたならうれしく思う。最後になったが、講座の開催にあたっては大津市北部地域文化センターの中川弘所長にお世話になった。この場を借りて感謝申し上げたい。

(5) 図書館連携講座

6) 第 6 回滋賀短期大学図書館連携講座 in 堅田

生活学科 原 知子

1. はじめに

市民を対象に「平成 30 年度大津市立北図書館教育講座」として、大津市北図書館との共催で第 6 回滋賀短期大学図書館連携講座 in 堅田 が実施された。平成 30 年 11 月 17 日（土）、「調理と温度」のテーマでお話した。

2. 講座概要

1) 加熱による食材の変化・火加減とおいしさ

調理は英語で「cooking」という言葉を用いるが、「cook」すなわち「加熱する」という意味の言葉である。文明が進み、衛生状態もよくなっているが、食べるものを安全に調理するためには、加熱殺菌はまだ主要な手段である。しかし、特に肉や魚、卵などのタンパク質系素材では加熱しすぎると硬くなったりパサついたりとおいしさが損なわれることがある。

2) 加熱と衛生

安全を優先するとおいしさが損なわれるため、加熱の加減が調理では大変重要となる。衛生面では、一般的な食中毒細菌では、食品の内部温度 75℃で 1 分以上加熱すると死滅しやすいが、ノロウイルスでは 85~90℃以上で 90 秒以上と高温を要する。しかし、ハンバーグの内部温度を測りながら 75℃になってから 1 分以上加熱していると、外側は硬くなりすぎ、焦げてしまいがちである。実際の調理操作によってビーフステーキやカキフライの内部温度が加熱温度と時間によってどの程度になっているかの参考データを紹介した。ところが、調理器具が異なれば同じ条件に設定したとしても実質加熱温度やばらつき具合は異なる。ということから今回は食材の側でなく、台所の熱源による温度上昇や温度分布の違いに着目してお話をした。

3) ガスコンロと IH コンロの違い

一般家庭で普及している加熱用の熱源は、主にガスコンロと IH コンロである。これらの熱源は同仕様のフライパンや鍋を用いて加熱しても、温度上昇速度や器具によるばらつき、鍋底の温度分布、焦げ付きやすい場所等が異なる。ガスコンロと IH コンロによるフライパン、鍋の加熱の特徴について、実測データに基づいて解説した。（参考資料として、共同研究で作成した「台所の熱源はガスコンロそれとも IH ヒーター？」 - IH ヒーターとガスコンロの特性比較資料 - を用いた）。

3. まとめ

普段何気なく調理していると、出来上がりが違って不思議に思うこともある。それがどういうところからきているのか、調理操作によるところは多いが、熱源による影響についても意識していただきたい。熱源の特徴をうまく生かして日々の調理に活用していただけたら幸いである。

最後になりましたが、ご参加いただいた方々、北図書館・本学の担当の方々に謝意を表します。

(6) 平野学区連携講座

1) 第2回平野学区連携教育講座

『命をつなぐ保存食』－民族の知恵に学ぶ－

生活学科 中平真由巳

1. はじめに

保存食は食料の不足する季節に人々の命をつないできた大切な食べ物ある。食糧の確保は、人類の歴史が始まって以来の最大の関心事であり課題であり続けてきた。それゆえ、人々は食糧を安定して確保するために膨大な時間とエネルギーを費やして知恵を絞ったのである。

魚とコメが結びついた食事の傑作ともいえるなれずしは、湖国を代表する食の文化で乳酸発酵を利用した保存食である。自然の恵みを無駄なくおいしく食べ切る先人の様は見事で、厳しい自然と共に生きてきた知恵と工夫に目を引かれる。ここでは、湖国の保存食と共に、アジア各地に残る多様な保存食から地域の食文化の真の価値の再発見を試み、保存食とその利用法を通して風土に根ざした知恵に学ぶ。

2. 内容

保存食とは、季節的に大量生産される食料を腐らせてことなく、非生産時期までいかに備えておくことができるか、その試行錯誤の過程で生まれてきた、保存、貯蔵の知恵と技術である。

(1) 滋賀県の食と保存食

琵琶湖の幸を柱に、近江米、豆、芋、豊かな野菜類を組み合わせたバランスの良い形で食事を営んできた。湖魚を使った滋賀県の伝統料理は数多くあるが、その中でも「ふなずし」で代表される「なれずし」は代表的である。なれずしは、すしの原型で、魚などを塩と飯で乳酸発酵させた漬物である。湖国を代表する食文化として、平成10年にふなずしをはじめとする湖魚のなれずし、湖魚の佃煮、アメノイオゴ飯、日野菜漬け、でっちようかんが滋賀県の無形民俗文化財に指定された。

(2) アジアモンスターの保存食

東南アジアの温暖な気候と豊かな水は、稲作と淡水魚の食文化としても実を結んできた。米と魚の発酵食品の利用は気候を逆手に利用した保存食であり、自然の力と人の技が一つになってはじめて完成される賜である。

(3) 乳用地域の保存食

農地に恵まれない乾燥地帯では、そこにからうじて生える草を家畜に食べさせ、それを乳に換えて利用した。ヨーグルトやチーズは、厳しい冬の間に命を繋ぐ知恵と技の込められた大切な保存食でもある。

3. まとめ

今回は、保存の手法の一つである発酵を通して、自然と共に生きる人々の食と暮らしを垣間見てきた。滋賀県にも自然との関係を大切にして生み出されてきた郷土料理や保存の知恵は多く、それがよい形で今も残っている。地域の知恵をしっかりとつかみとり、力強く生きていく、そのような生き方暮らし方を分かち合う時となつた。

(7) 滋賀短期大学全学的プロジェクト

1) 第1回幼児教育アカデミーinSHIGATAN

幼児教育保育学科 久米 央也

1. はじめに

新しく改訂される幼稚園教育要領や保育所指針等にどう対応して具現化していくかについて、全学的な研究体制のもとに取組を始めおり、その成果を踏まえ、滋賀県下の保育所、幼稚園、こども園、市町教育委員会の関係者を対象に研究会「第1回幼児教育アカデミーinSHIGATAN」を開催した。滋賀短期大学が長年培ってきた研究の財産を県下にお示しし、少しでも滋賀県の幼児教育充実に向け貢献したいという願いを込めて開催をした。2月の土曜開催という中、多くの先生方の参加があった。

2. 研究会概要

(1)日時 平成30年2月24日(土) 13時~17時

(2)会場 滋賀短期大学

(3)研究テーマ「未来にはばたく豊かな子どもたちの育成に向けて」

(4)講座・講演内容

本研究会は3部構成で開催した。第1部は研修講座「豊かな感性を育む造形表現講座」である。3つの講座から希望する講座を選択し参加してもらった。どの講座も、大変熱心に参加していただけ、事後アンケートにおいても高い評価をしていただいた。

A講座「ねんどを使った造形表現」深尾秀一教授(滋賀短期大学)

B講座「木を使った造形表現」手良村昭子教授(滋賀短期大学)

C講座「紙・のり・ハサミを使った造形表現」松村都子園長(守山市立吉身幼稚園)

第2部は、本学の全学的プロジェクトの取組の発表である。平成29年度から全学的に取り組んでいる幼児教育の教材開発等の取組を副学長の小山内幸治教授により行った。

第3部は、聖徳大学 小田豊教授による「これからの中幼児教育の充実に向けて」という演目での講演である。これからの、日本の幼児教育についてわかりやすく解説していただいた。文科省視学委員を歴任された著名な先生による講演でもあり、多くの方の参加をいただいた。



研修講座Cの様子

3. 総括

滋賀短期大学として全学的に研究会を開催したのは初めての取組であったが、多くの参加者に恵まれ概ね成功したといえる。今後も、毎年開催し滋賀県の保育・幼児教育充実に寄与していきたい。

6. 高大連携事業

(1) 滋賀県教育委員会の連続講座（2018年8月）

- 1) 2018年8月21日 10:30~12:00 滋賀短期大学
“食育”について考える～五感を使って食を学ぶ～ 灰藤友理子（滋賀短期大学助教）
- 2) 2018年8月22日 10:30~12:00 滋賀短期大学
子どもの心理学 萩田純久（滋賀短期大学教授）
- 3) 2018年8月22日 13:00~14:30 滋賀短期大学
ホスピタリティについて考えてみよう～おもてなしの心～
沖山圭子（滋賀短期大学教授）
中村吉弘（滋賀短期大学特任教授）
若生眞理子（滋賀短期大学准教授）

(2) 滋賀県等の高等学校への出前授業（2018年1月～2018年12月）

- 1) 2018年1月17日 北大津高校
紙から広がる造形の世界 深尾秀一（滋賀短期大学教授）
- 2) 2018年1月24日 安曇川高校
幼児のための音楽表現と身体表現～リトミックを取り入れて～
松井典子（滋賀短期大学助教）
- 3) 2018年2月19日 伊賀白鳳高校
保育・幼児教育における人形の活用～人形遊びから人形劇～
浜崎由紀（滋賀短期大学助教）
- 4) 2018年2月19日 伊賀白鳳高校
お客様が本当に欲しいものは何か 江見和明（滋賀短期大学准教授）
- 5) 2018年3月13日 堅田高等
保育・幼児教育の魅力と可能性 北後佐知子（滋賀短期大学講師）
- 6) 2018年3月14日 湖南農業高校
保育・幼児教育における人形の活用～人形遊びから人形劇～
浜崎由紀（滋賀短期大学助教）
- 7) 2018年3月20日 湖南農業高校
子どもと造形表現 深尾秀一（滋賀短期大学教授）
- 8) 2018年3月22日 長浜北星高校
保育・幼児教育の魅力と可能性 北後佐知子（滋賀短期大学講師）

-
-
- 9) 2018年7月11日 野洲高校
こどもと音楽 柚木たまみ（滋賀短期大学教授）
 - 10) 2018年7月11日 野洲高校
スポーツに関わる仕事 山中博史（滋賀短期大学教授）
 - 11) 2018年7月13日 八幡商業高校
食べ物と健康～たんぱく質～ 清水まゆみ（滋賀短期大学教授）
 - 12) 2018年7月13日 伊香高校
ホテルスタッフ、ブライダル関連の仕事 池田貴彦（滋賀短期大学入試広報課主事）
池上ゆりえ（ビジネスコミュニケーション学科2回生）
 - 13) 2018年9月26日 甲西高校
糖尿病の食事療法を学ぼう 山岡ひとみ（滋賀短期大学講師）
 - 14) 2018年10月24日 大津清陵高校
子どもと音楽 柚木たまみ（滋賀短期大学教授）
 - 15) 2018年11月8日 彦根翔西館高校
保育者になるために大切なこと 安井恵子（滋賀短期大学元准教授）
 - 16) 2018年12月7日 栗東高校
保育者になるために大切なこと 前川頼子（滋賀短期大学准教授）
 - 17) 2018年12月10日 八幡高校
絵本の読み語りを体験してみよう！ 浜崎由紀（滋賀短期大学講師）
 - 18) 2018年12月19日 草津東高校
保育の中の音楽・保育のための音楽 柚木たまみ（滋賀短期大学教授）

2018年1月8日(月) 中日新聞

琵琶湖の魚 興味津々

滋賀短大生が伝統食実習

琵琶湖の魚を調理して、組合連合青年会の三者が連携して主催。フナの南ゆかりの食文化の魅力や、自然の大切さを実感してもらう「地域伝統食実習」が、大津市竜が丘の滋賀短大であつた。

滋賀短大生が伝統食実習

萌花さん(左)は「今まで海の魚ばかり食べていたし、触れるのも切り身が焼き、イサザのすまし汁など、二年生三十七人が固有種をふんだんに使ったメニューに挑戦した。

守山漁業組合の戸田直弘さんは「自分たちが漁をさせてもらえるのは、琵琶湖の魚を食べてくれる人がいるから。湖魚を食べる昔からの文化が途絶えかけているからこそ、湖魚のおいしさ、食べる文化に触れてもらいたい」と語った。

包丁を手際良く使い、湖魚をさばく学生たち――大津市竜が丘の滋賀短大で

(高田みのり)



2018年5月15日(火)

広報おおつ No.1342

滋賀短期大学図書館連携講座「絵本と子育て」

時6月9日(土)14時~15時30分

内講師は浜崎由紀氏 滋賀短期大学

講師

定先着60人

¥無料

申直接または電話で同館へ

2018年6月1日(金)

広報おおつ No.1343

滋賀短期大学図書館連携講座

時7月7日(土)14時~15時30分

内テーマ「生きるために食べなければならない～ビタミンの話を中心に～」。講師は堀池喜八郎氏 滋賀短期大学特任教授

定先着60人

申6月9日(土)から直接または電話で同館へ

¥いずれも無料

2018年6月9日(土) 京都新聞

大津市長等2丁目のまちおこし会社「百町物語」は、菱屋町商店街で4月末に閉店した洋菓子店跡をレンタルスペースに貸し出す。10日には、「スタジオ フライハイト」と「百町物語」。洋菓子店が残していくため、「ベーカリー塾」と「パンや冷蔵庫、ショーケースなどが利用でき、1日単位でレンタルを受け付けています。

大津の「百町物語」あす、カフェと親子向け催し

10時から、同短大の学生によるパンとケーキの販売や絵本の読み語り、手作りおもちゃのワークショップを実施する。問い合わせは同社077(5)4522。

滋賀短期大(大津市)
の菓子・パン研究サー
クル「ベーカリー塾」
は9日から3日間、ベ
ーカリーカフェを同市
長等2丁目の菱屋町商
店街内のレンタルスペ
ースで開店する。県内
産のブルーベリーやナ
シエによる「卒業生

9日は、ホテルシェ
フと卒業生のパーティ
ーで、プロの料理とスイ
ーツが楽しめるよう日替
わりの企画も充実させ
た。

10日は、幼稚教育保育学
科の学生サークル「あ
そびくらぶnekko」が、キッズスペ
ー

滋賀短大生がベーカリー

あすから大津・菱屋町商店街で

県産果物パンや日替わり企画



7月のイベントでパンを販売する学生ら
(大津市内)

スを設け、絵本や紙芝居の読み聞かせを行
う。

連日、パンや焼き菓子は10種類程度並べる
予定。午前10時～午後

第閉店する。
(堀田真由美)

平成30年度滋賀短期大学 図書館連携講座

時内①8月4日(土)14時～15時30分
=食べ物と健康－たんぱく質－②9月
1日(土)14時～15時30分=安南貿
易と近江商人
内講師は①清水まゆみ氏 同大学教
授②伊澤亮介氏 同大学特任助教
定①50人②先着50人
申直接または電話で同館へ
※②の申込開始は8月1日(水)。

2018年7月15日(日)

広報おおつ No.1346

夏本番。琵琶湖では、早朝から網を下ろしてゴリ漁が行われています。琵琶湖周辺では、ヨシノボリの仲間のことを「ゴリ」といいます。春から夏に孵化して、一ヶ月に育った稚魚を七八月に「ゴリ曳網」という漁法を用いて捕る季節の魚です。鮮度が落ちるのが早く、手に入つたらすぐに加工しないと姿形がなくなり溶けてしまいます。



ゴリタコス

ます。

今回は、若い世代に滋賀の食材を利用してもらえるように、楽しく簡単に作れる料理を考えて出版した「グックしが」の中から、ゴリを使ったメキシカン、ゴリタコス=写真=を紹介します。タコシェルのカリッとした歯触りとタバコのパンチの効いた辛み、レモンの爽やかな酸味がゴリと相性の良い一品です。

湖国の食

は、ほのかな甘さを味わう塩ゆで、常備食として楽しむつぐだ煮やあめ煮です。また、お盆のごちそうとしても出されます。自然の恵みをそのままいただくことができるゴリは、良質のタンパク質やカルシウム、体の機能調整に欠かせないミネラル類などに富み、これらの栄養素を効率よく摂取でき

夏の効率的な栄養補給に

【材料】2人分。ゴリ30㌘、トマト150㌘、アボカド50㌘、タマネギ20㌘、レモン汁10㌘（レモン1／3個分）、塩2㌘（小さじ1／3）、タバスコ少々、レタス10㌘、タコシェル4枚

【作り方】①ゴリは塩を加えた熱湯でさっとゆで、ざるに上げて冷ます②トマトとアボカドは1切角、タマネギはみじん切りにする

③①と②をレモン汁、塩、タバスコである④タコシェルに③を挟み、小さくちぎったレタスを敷いた器に盛りつける。ゴリをトマトやアボカドと組み合わせたタコスは、色鮮やかで見た目にも食欲をそそります。栄養バランスの整つた、夏の手軽な昼食にもお勧めです。

(滋賀の食事文化研究会・中平真由)

2018年8月28日(火)毎日新聞



夢の バイリンガル保育士 目指せ!!

日本生まれの日系ペルーカー4歳で滋賀短大幼稚教育保育学科2年のペロス・パメラさん(20)が、外国籍の園児が多い地元の湖南市で保育実習に取り組み、来春から保育士として働く夢の実現へ歩んでいます。全国的に外国籍の園児は増加傾向にあるが、外国籍の保育士は極めて少ないのが現状。スペイン語ができるパメラさんは「言葉が分からない園児に寄り添いたい」と話す。【大澤重人】

日系ペルーカー4歳 パメラさん

パメラさんの両親はペルーカー出身で、出稼ぎ先の日本で出会い、結婚した。岐阜県で生まれたパメラさんは小学校入学前に滋賀県に引っ越した。

パメラさんが住む湖南市には、製造業などで働く労働者と家族が多く居住。外国籍が約2820人と市民の5%に当たる。実習先に希望した市立水戸保育園は、園児90人のうち26人がブラジルやペルーなど外国籍だ。

パメラさんは今月始めてに統き、20~24日にはあった実習では4歳児約20人を担当。給食の時間には来日から間もない外国籍園児の隣に座り、言葉を交わしながらハムカツやカボチャのそぼろ煮などを一緒に食べた。別子の食事が進まないのに気づいた保育士に「豚って何て言うの?」と尋ねられて、「ゼルド」と教える場面もあった。

パメラさんについて、4歳児の担任保育士の佐治美月さん(24)は「ブラジル出身の子には

湖南

育保育学科2年のペロス・パメラさん(20)が、外国籍の園児が多い地元の湖南市で保育実習に取り組み、来春から

保育士として働く夢の実現へ歩んでいます。全国的に外国籍の園児は増加傾向にあるが、外国籍の保育士は極めて少ないのが現状。スペイン語ができるパメラさんは「言葉が分からない園児に寄り添いたい」と話す。【大澤重人】

し、高校まで公立学校に通った後、滋賀短大に進学した。幼い頃から子どもが好きで「人の役に立ちたい」と保育士を志望した。

パメラさんが住む湖南市には、製造業などで働く労働者と家族が多く居住。外国籍が約2820人と市民の5%に当たる。実習先に希望した市立水戸保育園は、園児90人のうち26人がブラジルやペルーなど外国籍だ。

パメラさんは今月始めてに統き、20~24日にはあった実習では4歳児約20人を担当。給食の時間には来日から間もない外国籍園児の隣に座り、言葉を交わしながらハムカツやカボチャのそぼろ煮などを一緒に食べた。別子の食事が進まないのに気づいた保育士に「豚って何て言うの?」と尋ねられて、「ゼルド」と教える場面もあった。

日本生まれの日系ペルーカー4歳で滋賀短大幼稚教育保育学科2年のペロス・パメラさん(20)が、外国籍の園児が多い地元の湖南市で保育実習に取り組み、来春から保育士として働く夢の実現へ歩んでいます。全国的に外国籍の園児は増加傾向にあるが、外国籍の保育士は極めて少ないのが現状。スペイン語ができるパメラさんは「言葉が分からない園児に寄り添いたい」と話す。【大澤重人】

日本生まれの日系ペルーカー4歳で滋賀短大幼稚教育保育学科2年のペロス・パメラさん(20)が、外国籍の園児が多い地元の湖南市で保育実習に取り組み、来春から保育士として働く夢の実現へ歩んでいます。全国的に外国籍の園児は増加傾向にあるが、外国籍の保育士は極めて少ないのが現状。スペイン語ができるパメラさんは「言葉が分からない園児に寄り添いたい」と話す。【大澤重人】

スペイン語で外国籍園児の心に架け橋

向こうの言葉で話すなど、私にできへんことをやつてくれている。実習生の場合、話しかけてこない子にはなかなか対応できないのに、水着の着替えなどで困っている子に自分から進んで手伝ってくれる」と語る。保育士の資格に国籍は関係ないが、湖南市の公立保育園にも南米系の保育士はない。小山律子園長(47)は「通訳を通してではなく、じかに子どもと接してくれるのはありがたい。保護者の会話や、私たちでは複雑な内容が話せないので助かる」と期待を寄せれる。

法務省によると、在留外国人のうち0~6歳は昨年末で11万8690人と5年前の1・3倍に急増した。かながわ国際交流財団(横浜市)などが、外国にルーツがあり、保育士を目指す専門学校生を対象に返還義務のない奨学生制度(年80万円を3年を設けるなど支援の動きもある)がある。

パメラさんが昨年、別の保育園で実習をした時に印象的な出会いがあった。来日直後のペルーカーの子が何か困つていた様子だった。スペイン語で尋ねるところ、誰かが別の子をたたく場面を自撃したといい、「そういうの嫌なんだよ」と本音を打ち明けられたという。

パメラさんは「来日した子どもが日本の魅力を感じられるようなお手伝いをしたい」と語った。

2018年9月8日(土) リビング滋賀

菱屋町商店街の入り口近くにある貸しスペース「スタジオフライハイツ」百町物語」(大津市長等2)。今年4月に閉店した人気洋菓子店の設備をそのまま利用したこの貸しスペースで、滋賀短期大学のパン・スイーツ研究サークル「ベーカリー塾」が、6月から月1回、ベーカリーカフェを開いています。

その人気ぶりを聞きつけ、記者が訪ねたのは8月。店内にはマフィンやブリオッシュなどおいしそうな焼き立てパン約10種類に、滋賀県産のナシやブルーベリーを使ったタルト、看板商品のスイートポテト「いもたる」がずらり。絶え間なく客がやって来る状態で「週末に開催した過去2回は早くに完売して、昼過ぎには店を閉めた」というのも納得です。

同サークル部長の岡川美咲さんは「一級の設備が整ったお店で実地体験ができるので気持ちが引き締まります。将来の仕事に役立たせたい」とやる気を感じている様子。また、夏休み期間中にはOBが腕を振るう「卒業生レストラン」、2回目には酢を使ったドリンクの販売、3回目には同大学幼稚教育学科の学生による絵本や紙芝居の読み聞かせを同時に開催を増しているようです。

取り組む中で、若い世代を街に呼び込みたいと常々考えていました。同大学の金丸政義教授と縁あって知り合い、街に貢献できる場を求めていたベーカリー塾とタッグを組むことができました」と経緯を話します。

「ここを拠点に、多彩な産学連携プロジェクトを展開していきたい。夜のライフはどうだうなドライアイスはいっぱい出してくれるのや、「一つ一つ実現できれば、いずれはここに来たら何かやってると思ってもらえるやうに毎日オープンを目指します!」

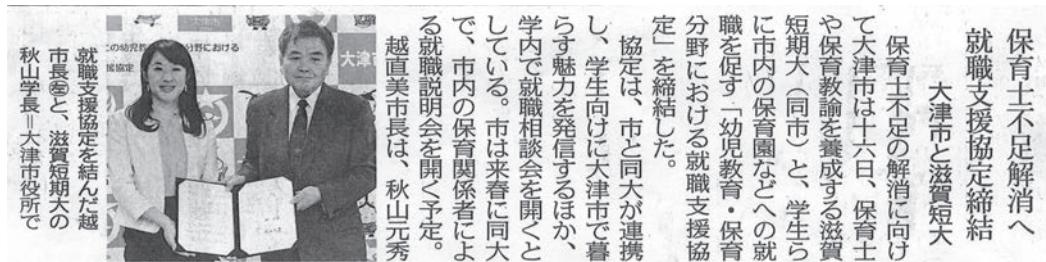
若者が集うニュースボットとなる日が楽しみですね。次回のベーカリーカフェは、9月12日(水)に開催。問い合わせは「百町物語」(☎077-(526)4522)。

2018年10月1日(日) 広報おおつ No.1350

滋賀短期大学図書館連携講座

時11月17日(土)14時~15時30分
内テーマ「森鷗外と高木兼寛にまつわるビタミンの話」
※いざれも詳しきは同館へ

2018年10月17日(水) 中日新聞



保育士不足解消へ
就職支援協定締結
大津市と滋賀短大
保育士不足の解消に向け
て大津市は十六日、保育士
や保育教諭を養成する滋賀
短期大(同市)と、学生ら
に市内の保育園などへの就
職を促す「幼児教育・保育
分野における就職支援協
定」を締結した。

協定は、市と同大が連携
し、学生向けに大津市で暮
らす魅力を発信するほか、
学内での就職相談会を開くと
している。市は来春に同大
で、市内の保育関係者によ
る就職説明会を開く予定。
越直美市長は、秋山元秀

学長と協定書に調印し、「卒業する学生さんは、ぜひ
大津市で働いていただきたい」と期待した。秋山学長
は「保育内容の向上に貢献
したい」と話した。
市内の待機児童は、二〇一五~一七年度はゼロだっ
たが、ことし四月には五千
八人に急増。市は「非常事
態宣言」を発表し、対策を
進めている。
(作山哲平)

2018年10月21日(日) 中日新聞

お手玉やわらべ歌を学ぶ 甲賀・旧土山宿 短大生がお年寄りから



滋賀短大(大津市)の幼児
教育保育学科の二年生十七人
が、甲賀市土山町の旧土山宿
にある東海道伝馬館で、地元
のお年寄りからお手玉やわら

お年寄りにお手玉を使った遊びを教わる滋賀短大の学生たち=甲賀市土山町の東海道伝馬館で
代表(四)ら六人が、講師を務めた。福永さんは「お手が煮えた」など、地元に伝わるお手玉遊びの歌「おじやみ歌」を紹介し、さまざまな技も披露。学生たちもまねて楽しんだ。

向かい合って「春が来た」を歌いながら、歌詞の「た」のタイミングで相手にお手玉を投げる遊びも実践。宮沢佳乃さん(左)は「五個も使って手の甲に載せるなど、いろいろな遊び方があることを知った。友達と協力して遊ぶということを、子どもたちに教えていきたい」と話した。

学生たちは今後、短大付属幼稚園で模擬保育をする予定で、習ったお手玉も採り入れるという。
(築山栄太郎)

2018年10月26日（金）京都新聞

滋賀短大図書館連携講座
11月17日後2時、市立図書館077(526)4600。テーマは「森鷗外と高木兼寛にまつわるビタミンの話」。申し込みは同館。

2018年11月19日(月) 中日新聞

滋賀短大在学中の外国人集住から生まれる。日本生まれだが、家では母語のスペイン語で会話をしている。なぜ日本語をほとんど話せなかつたか。市内の公民学校へ入ったが、母語から突然日本語を学ぶのが大変だつた。その後、日本語教育を通じ、クラスの友人と話すようになつた。生後数カ月で湖南市へ移住した。両親が工場で働いていたため、幼いころは近所に預けられた。五歳のとき、近隣の保育所へ入所。夜遅くまで働く両親の待つ間、保育士がいつも一緒に遊んでくれたのが思ひ出だ。

バーメラさんは岐阜県出身。生後数カ月で湖南市へ移住した。両親が工場で働いていたため、幼いころは近所に預けられた。五歳のとき、近隣の保育所へ入所。夜遅くまで働く両親の待つ間、保育士がいつも一緒に遊んでくれたのが思ひ出だ。

甲子西北中学校教諭として中華高校へ進む。両親が土建工場で働く傍で、地域の祭りでバーレル料理の展示を開いてくれるやうな温かさを感じ

日本生まれだが、家では母語のスペイン語で会話をしている。なぜ日本語をほとんど話せなかつたか。市内の公民学校へ入ったが、母語から突然日本語を学ぶのが大変だつた。その後、日本語教育を通して、クラスの友人と話すようになった。ただ、社会的授業では難しい漢字や言葉が多々、文章を多く理解するには難しかつたという。

母親の告白によれば、当初は声が弱くて、仕事にした方がいい」と考へ、進学を検討。幼い子どもが好きだったことから、高等教養をもつて調理技術を学ぶことを選んだ。両親が土建工場で働く傍で、地域の祭りでバーレル料理の展示を開いてくれるやうな温かさを感じ

湖南の日系ペルー人3世 パメラさん



手作りおもちゃで乳児と遊ぶバメラ

保育士の夢へ 1歩ずつ前進

じた薬師丸ひろ子を志望校に決め、受験。時間は短く、間違ったが、あきらめず、コツコツ物事に取り組む自分の長所などを面接でアピールし、合格を果たした。

畠大では、県内外から通う多くの友人に囲まれながら学ぶ日々。保育士のほか幼稚園教諭の資格取得も、幼稚園教諭の資格取得について、湖南市内の保育園二園で保育実習に挑み、半内の子育て支援教室で乳幼児と遊ぶなど、経験を重ねている。ハメラさんは「子どもの笑顔を見ると、元気がもらえて楽しい」と話す。

実習先では、自分と同じ外国籍の子どもたちも見えた。外出身の開発が、友達と一緒に怒っていたことがあつた。

年明けに、保育園の採用試験を受けるというハメラさんは、「子どもは一人一人違うので、その子に合わせて、関わる方針を、愛情をこめて注いであげたい。たくさんの人とも見ること

葉が分からず、スペイン語で話せるハメラさんは、通訳を始めた。園児に教わるか、友達が別の方達に暴力を振るうたといい、「私が嫌だった」と話してくれた。「私もそんなふうに、どうして役立てるんだ」と。この経験がハメラさんにとって、湖南市内の保育園二園で保育実習に挑み、半内の子育て支援教室で乳幼児と遊ぶなど、経験を重ねている。ハメラさんは「子どもの笑顔を見ると、元気がもらえて楽しい」と話す。

実習先では、自分と同じ外国籍の子どもたちも見えた。外出身の開発が、友達と一緒に怒っていたことがあつた。

年明けに、保育園の採用試験を受けるというハメラさんは、「子どもは一人一人違うので、その子に合わせて、関わる方針を、愛情をこめて注いであげたい。たくさんの人とも見ること

葉が分からず、スペイン語で話せるハメラさんは、通訳を始めた。園児に教わるか、友達が別の方達に暴力を振るうたといい、「私が嫌だった」と話してくれた。「私もそんなふうに、どうして役立てるんだ」と。この経験がハメラさんにとって、湖南市内の保育園二園で保育実習に挑み、半内の子育て支援教室で乳幼児と遊ぶなど、経験を重ねている。ハメラさんは「子どもの笑顔を見ると、元気がもらえて楽しい」と話す。

実習先では、自分と同じ外国籍の子どもたちも見えた。外出身の開発が、友達と一緒に怒っていたことがあつた。

年明けに、保育園の採用試験を受けるというハメラさんは、「子どもは一人一人違うので、その子に合わせて、関わる方針を、愛情をこめて注いであげたい。たくさんの人とも見ること

ハラハラしてゐる場景を、斯く説いて紹介するにいたまでも、さういふ事は、ハラハラせしものなり。筆者によれば、筆者も地城で生活すたが、その中で、共に移り住んでいた家族も、それが不足で外国人労働者

子どもの生活、進路 理解深める

湖南·日枝中年3回

タロウノハシ

日本の学校のルール 詳しく



保譲者会

日本語の書類を記入する人は、その半数以上が、日本語を母語とする者である。

地域連携年報 第六号

平成 31 年 2 月 1 日

滋賀短期大学 地域連携教育研究センター

〒520-0803 大津市竜が丘 24-4

TEL 077-524-3605 FAX 077-523-5124

SUMIRE